

(19)日本国特許庁(JP)

(12)特許公報(B2)

(11)特許番号
特許第7563098号
(P7563098)

(45)発行日 令和6年10月8日(2024.10.8)

(24)登録日 令和6年9月30日(2024.9.30)

(51)国際特許分類		F I	
A 4 7 B	7/00 (2006.01)	A 4 7 B	7/00 A
A 4 7 B	13/00 (2006.01)	A 4 7 B	13/00 B
A 4 7 B	17/04 (2006.01)	A 4 7 B	13/00 Z
A 4 7 B	13/08 (2006.01)	A 4 7 B	17/04
A 4 7 G	7/04 (2006.01)	A 4 7 B	13/08 A
請求項の数 3 (全32頁) 最終頁に続く			
(21)出願番号	特願2020-172930(P2020-172930)	(73)特許権者	000001351
(22)出願日	令和2年10月14日(2020.10.14)		コクヨ株式会社
(65)公開番号	特開2022-64354(P2022-64354A)		大阪府大阪市東成区大今里南 6 丁目 1 番 1 号
(43)公開日	令和4年4月26日(2022.4.26)	(74)代理人	100085338
審査請求日	令和5年9月14日(2023.9.14)		弁理士 赤澤 一博
		(72)発明者	加藤 善雅
			大阪府大阪市東成区大今里南 6 丁目 1 番 1 号 コクヨ株式会社内
		(72)発明者	山西 学
			大阪府大阪市東成区大今里南 6 丁目 1 番 1 号 コクヨ株式会社内
		(72)発明者	西口 真由
			大阪府大阪市東成区大今里南 6 丁目 1 番 1 号 コクヨ株式会社内
			最終頁に続く

(54)【発明の名称】 テーブル

(57)【特許請求の範囲】

【請求項 1】

天板の上面に有底溝を設けたテーブルであって、
前記有底溝の両端部は、その深さ寸法が漸次小さくなって最端位置で略零となるように構成され、
前記有底溝は、各部において一定の深さ寸法を有する溝形成部材と、この溝形成部材の両端に嵌着され前記有底溝の端部を形成するエンドキャップとを天板の上面に埋設することにより形成されたものであるテーブル。

【請求項 2】

前記溝形成部材と前記エンドキャップとは、長手方向に若干の相対移動を許容された状態で嵌着されている請求項 1 記載のテーブル。

【請求項 3】

前記天板が、コア材の表面に化粧板を添設した多重構造をなすものであり、前記溝の両端が天板の両端近傍において閉塞されている請求項 1 又は 2 記載のテーブル。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、オフィス等で好適に使用されるテーブルに関する。

【背景技術】

【0002】

近時、働き方の多様化に伴い、執務用として比較的大きなテーブルを複数人で使用することも少なくない。

【0003】

ところが、従来のこの種テーブルは、中央に配線挿通用の開口部を備えている程度で、天板面は平坦であり、間仕切パネルや植生ボックス等のオプション類を配置したりスマートホンやタブレット端末を起立させて使用する場合には、それぞれ専用のブラケットや脚体等が不可欠である。そのため、多様なオプション類等を配置する場合には、種々の補助部品を用意しておく必要があり、何らかの対策が望まれている。

【0004】

このような要望に応えるため、天板の上面に有底溝を設けておき、その有底溝にオプション類に対する位置決め機能やスマートホン等を起立保持するための保持機能等を担わせることが考えられる。

【0005】

ところが、単にこれだけのものでは、有底溝の両端が入隅となるため、溝内に溜まった埃を掃き出すのが難しくなるという問題が予想される（課題1）。

【0006】

このような課題は、有底溝の両端を天板の両端に開放することで解消するよう思われるが、かかる構成を採用するとコア材の表面に化粧板を添設した多重構造の天板に適用した場合に問題が生じる。すなわち、多重構造をなす天板の端面に有底溝の端を開放すると、化粧板が切り欠かれてコア材の一部が露出し易くなり、天板の端面処理が面倒になるという不具合の発生が懸念される（課題2）。

【0007】

かかる事情は、複数人で執務に使用するテーブルに限らず、他のテーブルにおいても同様である。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0008】

【文献】特開2008-259714号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0009】

請求項1記載の発明は、前述した課題1を解消することを目的としている。

【0010】

請求項3記載の発明は、課題1に加え、前述した課題2をも解消することを目的としている。

【課題を解決するための手段】

【0011】

請求項1記載の発明に係るテーブルは、天板の上面に有底溝を設けたテーブルであって、前記有底溝の両端部は、その深さ寸法が漸次小さくなって最端位置で略零となるように構成され、前記有底溝は、各部において一定の深さ寸法を有する溝形成部材と、この溝形成部材の両端に嵌着され前記有底溝の端部を形成するエンドキャップとを天板の上面に埋設することにより形成されたものである。

【0012】

この明細書でいう「溝」とは、底を有する狭義の溝に限らず、一方向に連続的に伸びる貫通した孔をも含むものである。しかして、「有底溝」とは、文字通り底を有する狭義の溝を意味し、「貫通溝」とは、一方向に伸びる底を有しない上下に貫通した孔を意味している。

【0013】

また、本発明の「テーブル」とは、天板を複数名で使用することが可能な天板付家具全般を示す概念である。

10

20

30

40

50

【0015】

請求項2記載の発明に係るテーブルは、請求項1記載のものであって、前記溝形成部材と前記エンドキャップとは、長手方向に若干の相対移動を許容された状態で嵌着されているものである。

【0016】

請求項3記載の発明に係るテーブルは、請求項1又は2記載のものであって、前記天板が、コア材の表面に化粧板を添設した多重構造をなすものであり、前記溝の両端が天板の両端近傍において閉塞されているものである。

【発明の効果】

【0017】

本発明によれば、上述した課題1、2を解消することができるテーブルを提供することができる。

【図面の簡単な説明】

【0018】

【図1】本発明の一実施形態に係るテーブルの一つを示す全体斜視図。

【図2】同テーブルを示す平面図。

【図3】同テーブルを示す正面図。

【図4】同テーブルを示す底面図。

【図5】図2における要部を拡大して示す図。

【図6】図2におけるA-A線、B-B線、C-C線に沿った天板の断面図。

【図7】同テーブルの開口部に対する蓋体の装着状態を示す斜視図。

【図8】同テーブルの蓋体を開成姿勢とした天板を示す要部拡大斜視図。

【図9】図2におけるD-D線に沿った拡大断面図。

【図10】同テーブルの蓋体を開成姿勢とした状態を示す要部拡大断面図。

【図11】同テーブルの蓋体の開閉の態様を示す説明図。

【図12】同テーブルの蓋体を閉止姿勢とした状態を示す要部拡大断面図。

【図13】同テーブルへのクランプの取付態様を示す説明図。

【図14】同テーブルへのクランプの取付態様を示す説明図。

【図15】同テーブルの蓋体の使用態様を示す説明図。

【図16】同テーブルの溝の使用態様を示す説明図。

【図17】同テーブルを示す分解斜視図。

【図18】同テーブルを示す分解斜視図。

【図19】同テーブルの脚の天板への取付態様を示す説明図。

【図20】同テーブルの天板支持体の要部を示す分解斜視図。

【図21】同テーブルのブラケットの脚への取付態様を示す分解斜視図。

【図22】同テーブルのブラケットを脚に取り付けた状態を示す平面図。

【図23】同テーブルのブラケットを脚に取り付けた状態を示す正面図。

【図24】同テーブルのブラケットを脚に取り付けた状態を示す中央縦断面図。

【図25】同実施形態に係るテーブルの他の一つを示す全体斜視図。

【図26】同テーブルを示す平面図。

【図27】同テーブルを示す底面図。

【図28】図26におけるE-E線、F-F線に沿った天板の断面図。

【図29】同テーブルの溝形成部材及びエンドキャップの取付態様を示す分解斜視図。

【図30】同テーブルの有底溝の端部近傍を示す平面図。

【図31】図30における有底溝の巾方向中央で切断した断面図。

【図32】同テーブルの溝形成部材及びエンドキャップを示す斜視図。

【図33】図1～図24に示すテーブルの天板を抜き出して示す平面図。

【図34】図25～図32に示すテーブルの天板を抜き出して示す平面図。

【図35】同実施形態に係るテーブルへのフェルトパネルの装着状態を示す斜視図。

【図36】同テーブルにフェルトパネルを変形させて装着した状態を示す斜視図。

10

20

30

40

50

【図 3 7】同実施形態に係るフェルトパネルを示す正面図。
【図 3 8】同実施形態に係るフェルトパネルを拡大して示す側面図。
【図 3 9】図 3 7 における要部を拡大して示す図。
【図 4 0】同実施形態に係るフェルトパネルの変形容易領域近傍を拡大した斜視図。
【図 4 1】同実施形態に係るテーブルへのフェルトパネルの装着状態を示す斜視図。
【図 4 2】図 4 1 のフェルトパネルを変形させた状態を示す斜視図。
【図 4 3】同実施形態に係るフェルトパネルを示す正面図。
【図 4 4】同実施形態に係るフェルトパネルの下部を拡大して示す側面図。
【図 4 5】同実施形態に係るテーブルへのアクリルパネルの装着状態を示す斜視図。
【図 4 6】同実施形態に係るアクリルパネルを示す正面図。
【図 4 7】同実施形態に係るアクリルパネルの下部を拡大して示す側面図。
【図 4 8】同実施形態に係るアクリルパネルを示す分解斜視図。
【図 4 9】同実施形態に係るテーブルへの書見台の装着状態を示す斜視図。
【図 5 0】同実施形態に係る書見台を示す正面図。
【図 5 1】同実施形態に係る書見台を示す側面図。
【図 5 2】同実施形態に係る書見台を示す底面図。
【図 5 3】同実施形態に係るテーブルへの植栽ボックスの装着状態を示す斜視図。
【図 5 4】同実施形態に係る植栽ボックスを示す正面図。
【図 5 5】同実施形態に係る植栽ボックスを示す側面図。
【図 5 6】同実施形態に係るテーブルへのシェルフの装着状態を示す斜視図。
【図 5 7】同実施形態に係るシェルフを示す正面図。
【図 5 8】同実施形態に係るシェルフを示す側面図。
【発明を実施するための形態】

【0019】

以下、本発明の実施形態を図面を参照して説明する。

【0020】

この実施形態では、集成材製の天板を 2 枚用いたテーブル（以下、「集成材天板 2 枚タイプのテーブル」と称することがある）と、メラミン化粧板を備えた天板を 2 枚用いたテーブル（以下、「メラミン天板 2 枚タイプのテーブル」と称することがある）とについて説明しているが、本発明は、多重構造をなすメラミン天板 2 枚タイプのテーブルにのみ適用されている。

【0021】

＜集成材天板 2 枚タイプのテーブル＞（図 1～図 24）

集成材天板 2 枚タイプのテーブル S 2 T は、図 1～図 6、図 17 及び図 18 に示すように、奥行寸法が略同じ対をなす天板 1 を反使用端 1 b 同士を対面させて配置したものであって、両天板 1 の反使用端 1 b 間に上下に貫通する貫通溝 10（溝 m）が形成されているとともに、各天板 1 の上面 1 c に貫通溝 10 と平行な有底溝 11、12（溝 m）が形成されている。貫通溝 10 は、天板 1 の上面 1 c（天板面 f）側と下面 1 d 側とを連通させるもので、配線類の挿通や細い支柱の貫通等を許容し得る形態をなしている。

【0022】

天板 1 は、一定の奥行寸法を有した平面視四角形状のもので、集成材製の厚板により構成されている。これら天板 1 の反使用端 1 b 間に形成される貫通溝 10 は、図 1、図 2、図 4～図 6、図 17 及び図 18 に示すように、天板 1 の左右方向一端から他端まで連続して形成されたもので、全体が一定の標準溝幅 n を有している。

【0023】

有底溝 11、12 は、貫通溝 10 の標準溝幅 n と略同じ幅寸法を有するものである。この実施形態の場合、図 1、図 2、図 4～図 6、図 17 及び図 18 に示すように、各天板 1 に貫通溝 10 寄りの第 1 の有底溝 11 と、天板 1 の使用端 1 a 寄りの第 2 の有底溝 12 がそれぞれ設けられている。この実施形態の場合、奥行方向中央に位置する貫通溝 10 と、各天板 1 にそれぞれ設けられた第 1、第 2 の有底溝 11、12 とは、一定のピッチで平行

10

20

30

40

50

に配されている。これら貫通溝 10 及び有底溝 11、12 は、天板 1 の使用端 1a と平行をなしており、第 1 の有底溝 11 の途中には、図 5 に示すように、部分貫通溝 13 が設けられている。部分貫通溝 13 は、有底溝 11 と略同じ標準溝幅 n を有する標準溝幅部 13a と、この標準溝幅部 13a よりも幅の広い拡大溝幅部 13b とを有するもので、その部分貫通溝 13 の標準溝幅部 13a が有底溝 11 に連続させてある。詳述すれば、部分貫通溝 13 は、図 5 に示すように、嵩高いコンセントやコネクタ等を通過させることができる開口部 p を形成するための拡大溝幅部 13b を有し、その拡大溝幅部 13b の左右両端に、有底溝 11 に連続する標準溝幅部 13a を連続させて設けたものである。部分貫通溝 13 は、例えば、図 13 及び図 14 に示すように、コンセント C 等のオプション類を天板 1 上に取り付けるためのクランプ k を挿通させる役割を担い得るものであり、拡大溝幅部 13b から挿入させたクランプ k を横移動させて標準溝幅部 13a に係合させることによって、オプション類を天板 1 上に固定することができるようになっている。なお、この実施形態では、部分貫通溝 13 の標準溝幅部 13a は、上半部分が標準溝幅 n を有するとともに、下半部分が標準溝幅 n よりも狭い縮小溝幅 n_0 を有している。この縮小溝幅 n_0 は、クランプ k の部材厚み寸法に対応させたものである。

【0024】

また、部分貫通溝 13 の拡大溝幅部 13b は、図 5、図 6 および図 8～図 13 に示すように、天板 1 の上面 1c 側と下面 1d 側とを連通させる開口部 p を形成するものであり、この拡大溝幅部 13b に蓋体 14 が開閉可能に配されている。蓋体 14 は、閉止位置 (CL) で当該拡大溝幅部 13b の実質的な開口幅を標準溝幅 n に対応する溝幅にまで縮小させるとともに、開成位置 (OP) で当該拡大溝幅部 13b を開放し得るように構成されたものである。

【0025】

詳述すれば、このテーブル $S2T$ は、天板 1 に上下に貫通する開口部 p (部分貫通溝 13 の拡大溝幅部 13a) を設け、この開口部 p に蓋体 14 を開閉可能に設けたものである。なお、蓋体 14 は、図 10 及び図 15 に示すように、閉止姿勢 (CL) で上面 14a が天板面 f に面一となる平面視長形状のもので、開成姿勢 (OP) で天板 1 の上面 1c (天板面 f) よりも高い位置で上を向く物品支持面 14b を備えている。すなわち、蓋体 14 は、開閉時の回動端部となる部位の底面側に物品支持面 14b を備えており、開成姿勢 (OP) においてその物品支持面 14b が上を向くように構成されている。この物品支持面 14b は、例えば、図 15 に示すように、パーソナルコンピュータ PC 等の機器類を使用者側に前傾させて天板面 f 上に載置する場合等に好適に使われる。

【0026】

蓋体 14 の開口部 p に対する取付構造は、次の通りである。まず、この取付構造を上位概念で表現すれば、開口部の内側面及びこの内側面に対向する蓋体の外側面のいずれか一方に、第 1 の支軸と第 2 の支軸を天板奥行方向に間隔をあけて突設するとともに、他方に、前記閉止姿勢で前記第 1 の支軸に係合する第 1 の係合溝と、前記第 2 の支軸に係合する第 2 の係合溝とをそれぞれ設けており、蓋体を第 2 の支軸から第 2 の係合溝を離脱させて第 1 の支軸周りに回動させる一方向回動態様と、前記蓋体を前記第 1 の支軸から前記第 1 の係合溝を離脱させて第 2 の支軸周りに回動させる他方向回動態様とを選択的に採り得るように構成されている。

【0027】

符号を付して具体的に説明すれば、この実施形態における蓋体 14 の取付構造は、図 7～図 12 に示すように、開口部 p の内側面 pa に、第 1 の支軸 17 と第 2 の支軸 18 を天板奥行方向に間隔をあけて突設するとともに、蓋体 14 の外側面 14c に、閉止姿勢 (CL) で第 1 の支軸 17 に係合する第 1 の係合溝 15 と、第 2 の支軸 18 に係合する第 2 の係合溝 16 とをそれぞれ設けたものであって、蓋体 14 を第 2 の支軸 18 から第 2 の係合溝 16 を離脱させて第 1 の支軸 17 周りに回動させる一方向回動態様を採った場合に物品支持面 14b が上を向くように構成されている。

【0028】

第１、第２の係合溝１５、１６は、それぞれ蓋体１４の外側面１４ｃ及び底面１４ｄに開放された凹陷形状をなすものであり、図１０に示すように、第１の係合溝１５の奥端に、一方向回動態様により蓋体１４を開成させた場合に第１の支軸１７が係合して当該蓋体１４の落下を防止する屈曲溝部１５ａを設けている。

【００２９】

第２の係合溝１６は、図１１に示すように、蓋体１４を閉止姿勢に戻す途上で第２の支軸１８に摺接する案内カム部１６ａを有したものであり、案内カム部１６ａは、蓋体１４を閉止姿勢（ＣＬ）に戻す力を利用して当該蓋体１４を第１の支軸１７が屈曲溝部１５ａから外れる方向に引き込むように形状設定されたものである。図９は蓋体１４を取り外した状態を示しており、図１２は蓋体１４を閉止姿勢（ＣＬ）に保持させた状態を示している。

10

【００３０】

なお、蓋体１４は、回動端部１４ｅを天板１の使用端１ａ及び反使用端１ｂと平行に配したものであり、前述した一方向回動態様で開成させた場合に回動端部１４ｅが天板１の使用端１ａに近づく方向に平行移動するように構成されている。一方、蓋体１４を閉止姿勢（ＣＬ）に戻した状態では、図１２に示すように、当該蓋体１４の上面１４ａが天板面ｆと面一となり、部分貫通溝１３の拡大溝幅部１３ｂも標準溝幅ｎの開口を残して閉止されるようになっている。

【００３１】

以上説明したように、このテーブルＳ２Ｔの２枚の天板１により形成される天板面ｆには、図１、図２、図５及び図６に示すように、２枚の天板１間に形成された１本の貫通溝１０と、各天板１に２本ずつ形成された有底溝１１、１２とが、同じ標準溝幅ｎをなして平行に配されることになる。そして、この実施形態では、有底溝１１、１２の左右両端が、天板１の左右両端まで達して開放されているため、有底溝１１、１２と貫通溝１０とが対等な存在感をなして整然と配列されることになる。すなわち、天板面ｆ上には、５本の平行な溝ｍが等ピッチで配列された外観を呈することになる。なお、図１６に示すように、有底溝１１、１２にはスマートフォンＳＰやタブレット端末等を立てかけて使用することができる。

20

【００３２】

対をなす２枚の天板１は、図１、図３、図４、図１７及び図１８に示すように、天板支持体３に着脱可能に取付けられ支持されている。天板支持体３は、複数本の脚３１と、これら脚３１の上端部をそれぞれ天板１の下面１ｄに取り付ける複数のブラケット３２と、これらブラケット３２同士を連結し天板１の下面１ｄに添接する天板支持フレーム３８、３９とを具備してなる。

30

【００３３】

すなわち、このテーブルＳ２Ｔは、図１８及び図１９に示すように、天板１の下面１ｄに設けられたブラケット取付部ｑに脚３１の上端部をブラケット３２を介して取り付けたものであって、脚３１は、その上端部をブラケット３２に止着するための止着要素３４、３５を備えている。

【００３４】

ブラケット３２は、図１７～図２４に示すように、天板１の下面１ｄに添接する上向添接面３３ａ及び脚３１の上端面３１ｚが当接する下向取付面３３ｂを備えたブラケット本体３３と、このブラケット本体３３に設けられ脚３１が止着された状態で止着要素３４、３５を隠蔽する隠蔽部３６とを備えたものである。この実施形態のブラケット３２は、例えば、アルミダイキャスト製のものであり、ブラケット本体３３と隠蔽部３６とは一体に成型されている。

40

【００３５】

ブラケット３２は、図１９～図２２に示すように、隠蔽部３６により隠されない部位に、ブラケット本体３３を天板１にねじ止めするための天板取付用のボルト挿通孔３３ｃを備えており、脚３１をブラケット３２に止着したままで、天板１をブラケット３２に着脱

50

可能に接続することができるように構成されている。具体的には、ブラケット32の外縁部4カ所にボルト挿通孔33cが設けてあり、図19に示すように、これらボルト挿通孔33cに下側から挿通させた取付ボルトB0を天板1のブラケット取付部qに埋設した埋設ナットNにそれぞれ螺着することによって、当該ブラケット32を天板1の下面1dに取着することができるようになっている。

【0036】

脚31は、図21に示すように、上端面31zに開口するボルト挿通孔31a、31bと、側面31xに開口しボルト挿通孔31a、31bに直交する止着要素装着孔31c、31dと、止着要素装着孔31c、31dに装着されボルト挿通孔31a、31bに対応する部位に雌ねじ孔34a、35aを有する止着要素（ピン状ナット）34、35とを備えている。そして、ブラケット32を上から下に貫通させたボルトB1、B2をそのボルト挿通孔31eに挿入して前述の止着要素34の雌ねじ孔34a、34bに螺着することによって、当該脚31をブラケット32に止着している。

10

【0037】

また、脚31は、例えば木製のもので、図21に示すように、少なくとも上端部が、下肢空間に臨む内向端面31yと、この内向端面31yに連続する両側面31xとを有する柱状をなしており、前述したブラケット32の隠蔽部36は、内向端面31yと両側面31xとを部分的に覆う壁状をなしている。すなわち、脚31は、上端面31zに連続する内向端面31y及び両側面31xの上端部分に段状凹陷部分31ya、31xaを形成したものであり、前述した隠蔽部36を内向端面31y及び両側面31xの段状凹陷部分31ya、31xaに外嵌させている。止着要素装着孔31c、31dは、脚31の両側面31xにおける段状凹陷部分31xaに開口させてあり、止着要素装着孔31c、31dに装着された止着要素34、35は、脚31をブラケット32に取り付けた段階で隠蔽部36により完全に隠されることになる。

20

【0038】

脚31とブラケット32の止着構造をより具体的に説明すれば、図21に示すように、脚31の上端面31zには、1本の第1ボルト挿通孔31aと、2本の第2ボルト挿通孔31bと、2個の埋設ナット31eの雌ねじ孔31eaとが開口させてあるとともに、脚31の側面31xには、第1ボルト挿通孔31aに直交する第1止着要素装着孔31cと、第2ボルト挿通孔31bにそれぞれ直交する第2止着要素装着孔31dとが開口させてある。また、第1止着要素装着孔31cには、第1ボルト挿通孔31aに対応した位置に雌ねじ孔34aを有するピン状の第1止着要素34が装着してあるとともに、第2止着要素装着孔31dには、第2ボルト挿通孔31bに対応する位置に雌ねじ孔35bを有するピン状の第2止着要素35が装着してある。そして、ブラケット32の上面側から当該ブラケット32を貫通させて脚31の第1ボルト挿通孔31aに挿入した第1止着ボルトB1を第1止着要素34の雌ねじ孔34aに螺着するとともに、第2ボルト挿通孔31bに挿入した2本の第2止着ボルトB2を第2止着要素35の2つの雌ねじ孔35aにそれぞれ螺着し、さらに、ブラケット32の上面側から当該ブラケット32を貫通させた第3の止着ボルトB3を脚31の埋設ナット31eの雌ねじ孔31eaにそれぞれ螺着することによって、脚31をブラケット32に強固に止着している。この止着状態でブラケット32が天板1の下面1dに取着されるようになっている。止着状態では、第1止着要素装着孔31cに装着されている第1止着要素34、及び第2止着要素装着孔31dに装着されている第2止着要素35は全てブラケット32の隠蔽部36に覆われており、外部から視認することはできなくなる。また、ブラケット32の上面32aは天板1の下面に添接するため、前述した各止着ボルトB1、B2、B3の頭部も外部から視認不能になる。

30

40

【0039】

なお、各ブラケット32には、図19～図24に示すように、天板1の奥行方向に延びる縦の天板支持フレーム38、及び天板1の横幅方向に延びる横の天板支持フレーム39を取着するための一対のフレーム取付部37がそれぞれ設けられている。縦、横の天板支持フレーム38、39は、図19及び図20に示すように、角柱パイプ材製のもので、端

50

部近傍部における両側壁間に角柱のボルト受座Zを架設している。ボルト受座Zは、軸心jを斜め下方に向けたボルト挿通孔Zaを有するもので、天板支持フレーム38、39の底壁38a、39aにおける軸心jが通過する部位にボルト挿入用の窓38b、39bが設けられている。ブラケット32のフレーム取付部37は、天板支持フレーム38、39の端面38c、39cが当接する先端壁37aを有した角柱ブロック状のもので、その先端壁37aにボルト受座Zのボルト挿通孔Zaを通して挿入された斜めボルトBzを挿通させるボルト挿通孔37bが開設されているとともに、内部にその斜めボルトBzが螺着される図示しないナットが保持されている。先端壁37aには天板支持フレーム38、39の底壁38a、39aの内面に当接する受圧突起37cが一体に設けられている。この受圧突起37cは、天板支持フレーム38、39をブラケット32に斜めボルトBzにより強連結するためのものである。すなわち、軸心jを傾斜させた斜めボルトBzをボルト受座Zを通してナットに螺合させ緊締すると、天板支持フレーム38、39が上昇しつつ先端壁37aに接近する方向に付勢され、その底壁38a、39aが受圧突起37cの下面に押し付けられるとともに、その押付力を強めつつ端面38c、39cが先端壁37aに圧接されることになるため、天板支持フレーム38、39を位置決めしつつブラケット32に強固に連結することができる。各ブラケット32には、向きを90°異ならせて一対のフレーム取付部37が設けられているため、各ブラケット32に縦の天板支持フレーム38と横の天板支持フレーム39とをそれぞれ連結することができる。各天板支持フレーム38、39は、中間固定箇所sを天板1にねじ止めすることにより、天板1の固定をより確実なものにしている。

【0040】

ここで、図1は上述した集成材天板2枚タイプのテーブルS2Tを示す全体斜視図であり、図2は同平面図、図3は同正面図、図4は同底面図である。図5は、天板1の要部を拡大して示す平面図である。図6の(a)、(b)及び(c)は、それぞれ天板1の図2におけるA-A線、B-B線、C-C線に沿った断面図である。図7は、開口部pに対する蓋体14の装着状態を示す斜視図である。図8は、蓋体14を開成姿勢(OP)とした状態の天板1の要部を拡大して示す斜視図である。図9は、天板1の図2におけるD-D線に沿った断面を示す図であり、蓋体14を浮かせた状態で示している。図10は、蓋体14を開成姿勢(OP)とした状態を示す図である。図11は、蓋体14を開成姿勢(OP)から閉止姿勢(CL)に戻す途中の状態を示す図である。図12は、蓋体14を閉止姿勢(CL)とした状態を示す図である。図13は、蓋体14を他方向回転状態で開放し開口部p内部にクランプkを挿入する状態を示す図である。なお、図10～図13では、天板1を図9と同様の位置で切断して示している。図14は、クランプkを部分貫通溝13の標準溝幅部13a内に配した状態を示す要部断面図である。図15は、蓋体14を開成姿勢(OP)とし物品支持面14bにパーソナルコンピュータPCを支持させた状態を示す図である。図16は、溝m内にスマートフォンSPを立てかけた状態を示す図である。図17は、天板1と天板支持体3とを分離し上方から見た分解斜視図であり、図18は同下方から見た分解斜視図である。図19は天板1の下面1dへの脚31及びブラケット32の取付け態様を示す図である。図20は脚31へのブラケット32及び天板支持フレーム38、39の取付け態様を示す下方から見た分解斜視図である。図21は脚31へのブラケット32の取付け態様を示す上方から見た分解斜視図である。図22は脚31にブラケット32を取り付けた状態を示す平面図である。図23は同正面図、図24は同中央縦断面図である。

【0041】

なお、図33は、天板1のみを模式的に示す平面図であり、蓋体14を除去した状態で貫通した部分(貫通溝10、部分貫通溝13)を黒塗りで示している。

【0042】

<メラミン天板2枚タイプのテーブル>(図25～図32)

メラミン天板2枚タイプのテーブルM2Tは、奥行寸法が略同じ対をなす天板101を反使用端101b同士を対面させて配置したものであって、両天板101の反使用端10

1 b 間に上下に貫通する貫通溝 1 1 0 が形成されているとともに、各天板 1 0 1 の上面 1 0 1 c に貫通溝 1 1 0 と平行な有底溝 1 1 1、1 1 2 が形成されている。この点では前述した集成材天板 2 枚タイプのテーブル S 2 T と共通しているが、天板 1 0 1 の具体的構成が異なっているため、天板 1 0 1 に関連した部分については、テーブル S 2 T と異なった符号を付している。天板 1 0 1 に関連した部分以外については、集成材天板 2 枚タイプのテーブル S 2 T と同一又は対応する部分に同一の符号を付して説明を省略する。

【0043】

このテーブル M 2 T が、前述したテーブル S 2 T と異なっている点は、次の通りである。

【0044】

このテーブル M 2 T は、天板 1 0 1 の材質や形態が集成材天板 2 枚タイプのテーブル S 2 T とは異なっている。すなわち、このテーブル M 2 T の天板 1 0 1 は、コア材の表面にメラミン化粧板を添設してなるものであり、各天板 1 0 1 に形成された有底溝 1 1 1、1 1 2 は、左右両端 1 1 1 a、1 1 2 a が、天板 1 0 1 の左右両端 1 0 1 e の近傍において閉塞されている。有底溝 1 1 1、1 1 2 の両端部 1 1 1 b、1 1 2 b は、その深さ寸法が漸次小さくなって最端位置（両端 1 1 1 a、1 1 2 a）で略零となるように構成されている。具体的には、有底溝 1 1 1、1 1 2 は、各部において一定の深さ寸法を有する溝形成部材 G と、溝形成部材 G の両端に嵌着され有底溝 1 1 1、1 1 2 の端部 1 1 1 b、1 1 2 b を形成するエンドキャップ H とを天板 1 0 1 の上面 1 0 1 c に凹設された取付溝 1 0 1 f に埋設することにより形成されたものである。溝形成部材 G とエンドキャップ H とは、それぞれ合成樹脂により作られたもので、長手方向に若干の相対移動を許容された状態で嵌着されている。すなわち、溝形成部材 G は、各部同一の断面形状を有するチャンネル状のものであり、開口幅が前述した標準溝幅 n に設定されている。エンドキャップ H は、底壁 H a が外方端に向かって漸次上昇するように形成されたキャップ本体 H b と、このキャップ本体 H b の内方端に一体に形成され溝形成部材 G の端部外面に嵌合する嵌合部 H c とを備えている。なお、溝形成部材 G とエンドキャップ H とは、長手方向に若干の相対移動を許容された状態で嵌着されている。具体的には、溝形成部材 G と前記エンドキャップ H とは、当該溝形成部材 G の端面とキャップ本体 H b との間に若干の隙間 c を残した状態で天板面 f に刻設された取付溝 1 0 1 f に嵌着されており、寸法誤差や温度による部材の伸縮に対応し得るようになっている。

【0045】

また、このテーブル M 2 T は、貫通溝 1 1 0 の全体ではなく一部が標準溝幅 n を有するものである。換言すれば、天板 1 0 1 の反使用端 1 0 1 b 間に形成される貫通溝 1 1 0 は、一定の標準溝幅 n を有する標準溝幅部 1 1 0 a と、この標準溝幅部 1 1 0 a よりも幅の広い拡大溝幅部 1 1 0 b とを有するものである。この実施形態の場合、拡大溝幅部 1 1 0 b により形成される開口部 p は、開放されたままであり、格別な蓋体は設けられていない。標準溝幅部 1 1 0 a は、標準溝幅 n に設定されている。

【0046】

このテーブル M 2 T では、各天板 1 0 1 に 2 本ずつ有底溝 1 1 1、1 1 2 が形成されている。各有底溝 1 1 1、1 1 2 はそれぞれ全体が標準溝幅 n を有するものであり、貫通溝 1 1 0 の標準溝幅部 1 1 0 a と同じ幅寸法を有している。

【0047】

ここで、図 2 5 は上述したメラミン天板 2 枚タイプのテーブル M 2 T を示す全体斜視図であり、図 2 6 は同平面図、図 2 7 は同底面図である。図 2 8 の (a) 及び (b) は、それぞれ天板 1 0 1 の図 2 6 における E-E 線及び F-F 線に沿った断面図である。図 2 9 は、天板 1 0 1 への溝形成部材 G 及びエンドキャップ H の取付態様を示す分解斜視図である。図 3 0 は、有底溝 1 1 1 の端部 1 1 1 b 近傍を示す平面図である。図 3 1 は、図 3 0 における有底溝 1 1 1 の巾方向中央で切断した断面図である。図 3 2 は、溝形成部材 G 及びエンドキャップ H を示す斜視図である。

【0048】

なお、図 3 4 は、天板 1 0 1 のみを模式的に示す平面図であり、貫通した部分（貫通溝

10

20

30

40

50

110)を黒塗りで示している。

【0049】

＜テーブル上で使用されるオプション部材＞（図35～図58）

以上説明したテーブルS2T、M2Tは、いずれも天板面fに複数本の平行な溝m（貫通溝10、110と有底溝11、12、111、112）を備えており、それらの溝mを利用して次の（1）～（6）で説明する種々のオプション部材を装備することができる。

【0050】

（1）フェルトパネルZ型（図35～図40）

オプション部材であるフェルトパネル4は、前述したテーブルS2T、M2Tの天板1、101上で使用されるパネルであって単一素材で作られ、他の領域よりも変形しやすい変形容易領域41を部分的に備えている。このフェルトパネル4は、変形容易領域41を含め全体が一定の厚さ寸法を有するものであって、変形容易領域41には、複数本の切込線42が同じ方向を向けて互いに干渉しないように設けられている。具体的には、このフェルトパネル4は、一定厚さを有するフェルト素材により作られており、変形させない初期姿勢（図35、図37及び図38参照）では、略長方形形状をなしている。そして、変形容易領域41に設けられている切込線42は、一方のパネル面4aから他方のパネル面4bに貫通するように形成された直線状のものである。変形容易領域41には、図39に示すように、複数の切込線42を長手方向（鉛直方向）に間欠的に設けた切込線列43が複数本平行に形成されており、隣接する切込線列43の切込線42同士は横に並ばないように長手方向に位置を異ならせてある。

【0051】

詳述すれば、このフェルトパネル4は、左右方向に隣接する複数の区域44、45を有したパネルであって、変形容易領域41が、略鉛直な切込線42を有した上下に延びる帯状の領域であり、変形容易領域41を、区域44、45の隣接境界部分に配している。具体的には、このフェルトパネル4は、上下に延びる平行な2本の変形容易領域41によって中間区域44と、中間区域44の両側に位置する端部区域45とに区画されており、変形容易領域41を変形させることによって平面視略Z形となる屈曲姿勢（図36参照）に全体形状を変えることができるようになっている。端部区域45の下端近傍部には、円柱状のフェルト素材を貫設することによって、係止凸部46が形成されており、端部区域45の下端部45a（係止凸部46の下向面s4より下方に位置する突部t4）をテーブルS2T、M2Tのいずれかの溝mに嵌入させ、係止凸部46の下向面s4を天板面fに係止させることによって、当該フェルトパネル4を天板面f上に起立状態で設置することができる。

【0052】

なお、フェルトパネル4の厚み寸法4cは、テーブルS2T、M2Tの溝mの標準溝幅nと同じか若干大きく設定してあるため、係止凸部46の下向面s4よりも下方に突出する突部t4を構成する端部区域45の下端部45aは、所望の溝m（有底溝11、12、111、112、貫通溝10、110）に嵌合又は圧入することができ、補助器具を一切用いることなく天板面f上にがたつきなく設置することができる。この実施形態の突部t4は、溝mの幅寸法に対応する幅寸法w4を有した板状のものである。

【0053】

図35は、初期姿勢のフェルトパネル4を貫通溝10を利用してテーブルS2Tの中央に立設してデスクトップパネルとして使用する例を示している。この使用態様では、貫通溝10に沿って自由に設置位置を変更することが可能である。また、係止凸部46の下向面s4よりも下方に突出する突部t4の突出寸法を有底溝11、12の深さ寸法以内に設定しておけば、有底溝11、12を利用して当該フェルトパネル4を立設することもできる。

【0054】

図36は、屈曲姿勢のフェルトパネル4を2本の有底溝12を利用してテーブルS2Tの天板面f上に立設して、サイドパネル的に使用する例を示している。この場合も、両有

底溝 1 2 に対する嵌合位置を変更することによって、フェルトパネル 4 の設置位置を左右方向に変えることができる。また、端部領域 4 5 の突部 t 4 を嵌合させる溝 m を適宜選択することによって、中間領域 4 4 の向きを変更することもでき、多様な間仕切として便利に使用することができる。

【0055】

ここで、図 3 7 は、このフェルトパネル 4 を初期姿勢とした状態の正面図であり、図 3 8 は、同フェルトパネル 4 の拡大した側面図である。図 3 9 は、同フェルトパネル 4 の変形容易領域 4 1 の一部を示す拡大正面図である。そして、図 4 0 は、同フェルトパネル 4 の変形容易領域 4 1 を変形させた状態における当該変形容易領域 4 1 及びその近傍の拡大斜視図である。

10

【0056】

このフェルトパネル 4 は、テーブル M 2 T の貫通溝 1 1 0 や有底溝 1 1 1、1 1 2 を利用して当該テーブル M 2 T の天板面 f 上に同様に設置することもできる。

【0057】

(2) フェルトパネル暖簾型 (図 4 1 ~ 図 4 4)

オプション部材であるフェルトパネル 5 は、前述したテーブル S 2 T、M 2 T の天板 1、1 0 1 上で使用されるパネルであって単一素材で作られ、他の領域よりも変形し易い変形容易領域 5 1 を部分的に備えている。このフェルトパネル 5 は、変形容易領域 5 1 を含め全体が一定の厚さ寸法を有するものであって、変形容易領域 5 1 には、複数本の切込線 5 2 が同じ方向を向けて互いに干渉しないように設けられている。具体的には、このフェルトパネル 5 は、一定厚さを有するフェルト素材により作られており、変形させない初期姿勢 (図 4 1、図 4 3 及び図 4 4 の実線) では、略長形状をなしている。そして、変形容易領域 5 1 に設けられている切込線 5 2 は、一方のパネル面 5 a から他方のパネル面 5 b に貫通するように形成されたものであり、各切込線 5 2 は水平方向に延びている。

20

【0058】

詳述すれば、このフェルトパネル 5 は、下縁部 5 e に、素材を分断する分断線 5 4 を左右方向に間隔をあけて複数本 (2 本) 設けてこれら分断線 5 4 間に下縁 5 5 a が開放された暖簾部 5 5 を形成したものであって、変形容易領域 5 1 が、暖簾部 5 5 を厚み方向に変形させうように設けられている。図示例では暖簾部 5 5 の全体に変形容易領域 5 1 を設けているが、暖簾部 5 5 の上部にだけ変形容易領域を設けてもよい。

30

【0059】

このフェルトパネル 5 は、暖簾部 5 5 の両側に位置する端部区域 5 6 の下端近傍部に、円柱状のフェルト素材を貫設することによって、係止凸部 5 7 が形成されており、端部区域 5 6 の下端部 5 6 a (係止凸部 5 7 の下向面 s 5 より下方に位置する突部 t 5) をテーブル S 2 T のいずれかの溝 m に嵌入させ係止凸部 5 7 の下向面 s 5 を天板面 f に係止させることによって、当該フェルトパネル 5 を天板面 f 上に起立状態で設置することができる。

【0060】

フェルトパネル 5 の厚み寸法 5 c は、テーブル S 2 T の溝 m の標準溝幅 n と同じか若干大きく設定してあるため、係止凸部 5 7 の下向面 s 5 よりも下方に突出する突部 t 5 を構成する端部区域 5 6 の下端部 5 6 a は、所望の溝 m (有底溝 1 1、1 2、1 1 1、1 1 2、貫通溝 1 0、1 1 0) に嵌合又は圧入することができ、補助器具を一切用いることなく天板面 f 上にがたつきなく設置することができる。

40

【0061】

しかして、この実施形態の突部 t 5 も、溝 m の幅寸法 (標準溝幅 n) に対応する幅寸法 w 5 を有した板状のものである。

【0062】

なお、この実施形態の場合は、暖簾部 5 5 の下端も端部領域 5 6 の下端と同じ高さ位置に設定してあるため、端部領域 5 6 の下端部 5 6 a だけでなく暖簾部 5 5 の下端部をも溝 m に係合させて使用することもできる。

【0063】

50

図４１は、このフェルトパネル５を、集成材天板２枚タイプのテーブルＳ２Ｔに装着して使用する例を示している。この場合、暖簾部５５が開口部ｐ（部分貫通溝１３の拡大溝幅部１３ｂ）に対応するようにして端部区域５６の下端部５６ａ（突部ｔ５）を溝ｍ（部分貫通溝１３の標準溝幅部１３ａと有底溝１１）に係合させている。この使用態様によれば、図４２に示すように暖簾部５５を厚み方向に変形させることができるため、蓋体１４を開成させて開口部ｐを開放した状態で床下からの配線類等を円滑に天板面ｆ上に導くことが可能となる。

【００６４】

このフェルトパネル５をテーブルＭ２Ｔの天板面ｆ上で使用する場合には、暖簾部５５を貫通孔１１０の拡大溝幅部１１０ｂに対応させて設置するのが望ましい。

【００６５】

ここで、図４３は、このフェルトパネル５の正面図であり、図４４は、同フェルトパネル５の拡大した部分側面図である。この図４４には、暖簾部５５を厚み方向に変形させた状態を想像線で示している。

【００６６】

（３）アクリルパネル（図４５～図４８）

オプション部材であるアクリルパネル６は、上面１ｃ、１０１ｃに溝ｍ（貫通溝１０、１１０、有底溝１１、１２、１１１、１１２）を有する天板１、１０１上で使用されるものであって、天板１、１０１の上面１ｃ、１０１ｃ、すなわち天板面ｆに当接する下向面ｓ６を有するとともに、その下向面ｓ６よりも下方に突出する突部ｔ６を備えてなり、突部ｔ６を溝ｍに係合し得るように構成されている。突部ｔ６は、弾性変形可能な厚板状又はブロック状のものであり、突部ｔ６を溝ｍに弾性係合させ得るように構成されている。

【００６７】

溝ｍは、前述した貫通溝１０、１１０であっても有底溝１１、１２、１１１、１１２でもよく、突部ｔ６は貫通溝１０、１１０及び有底溝１１、１２、１１１、１１２の標準溝幅ｎよりも若干大きな幅寸法ｗ６を備えている。突部ｔ６の幅寸法ｗ６は、溝ｍの標準溝幅ｎと同じでもよいが、若干大きく設定することによって当該突部ｔ６に対応する溝ｍにがたつきなく弾性係合させることができる。

【００６８】

詳述すれば、このアクリルパネル６は、アクリル製のパネル本体６１と、このパネル本体６１の両側端近傍における下端部に嵌着したフェルト製の脚６２とを備えたもので、両脚６２の下面側に、天板面ｆに当接する下向面ｓ６と、この下向面ｓ６よりも下方に突出する前述の突部ｔ６とを備えている。パネル本体６１は、透明であっても半透明であってもよい。具体的には、図４８に示すように、パネル本体６１の下端側に脚６２の厚みに対応する幅寸法の取付スリット６１ａを下方に開口させて形成するとともに、脚６２にパネル本体６１の厚みに対応する幅寸法の取付スリット６２ａを形成しておき、これらの取付スリット６１ａ、６２ａを噛合わせることによって各脚６２がパネル本体６１にそれぞれ取り付けられている。

【００６９】

図４５は、このアクリルパネル６を、テーブルＳ２Ｔの奥行方向中央に位置する貫通溝１０に装着してデスクトップパネル的に使用した例であるが、このアクリルパネル６は、他の溝ｍを利用して天板面ｆの適宜な位置に立設することができる。

【００７０】

ここで、図４６は、このアクリルパネル６の正面図であり、図４７は、同アクリルパネル６の拡大した部分側面図である。図４８は、このアクリルパネル６の分解斜視図である。

【００７１】

（４）書見台（図４９～図５２）

オプション部材である書見台７は、複数の溝ｍ（貫通溝１０、１１０、有底溝１１、１２、１１１、１１２）を有する天板１、１０１の天板面ｆ上で使用されるものであって、天板１、１０１の上面１ｃ、１０１ｃ、すなわち天板面ｆに当接する下向面ｓ７を有する

10

20

30

40

50

とともに、その下向面 s 7 よりも下方に突出する突部 t 7 を備えてなり、突部 t 7 を溝 m に係合し得るように構成されている。

【0072】

詳述すれば、書見台 7 は、天板面 f 上に載置される基板 7 1 と、この基板 7 1 の前縁から後傾姿勢で起立する起立板 7 2 とを備えたものであり、基板 7 1 の下面側に天板面 f に当接する下向面 s 7 が形成されているとともに、基板 7 1 の後縁に下向面 s 7 よりも下方に突出する突部 t 7 が垂設されている。突部 t 7 を含む基板 7 1 及び起立板 7 2 は、板金素材に折曲加工を施すことにより一体に作られたものである。起立板 7 2 の下端中央部には、基板 7 1 から切り起こした転倒抑制板 7 3 が一体に設けられている。

【0073】

図 49 は、この書見台 7 (x) を、テーブル S 2 T の有底溝 1 2 を利用して天板面 f 上に位置決め状態で載置した状態を示している。すなわち、書見台 7 (x) の突部 t 7 は有底溝 1 2 に挿入されており、書見台 7 (x) は前後方向に位置決めされた状態となっているが、有底溝 1 2 に沿って左右方向に移動させることが自在である。この書見台 7 (x) は板金製のものであるため、磁石等を用いて起立板 7 2 の前面に書類等を自在に保持させることができる。

【0074】

図 49 は、この書見台 7 (y) を初期の目的とは異なり、パーソナルコンピュータ等の機器類を載置するチルト台として使用する場合をも示している。チルト台として使用する目的で設置した書見台 7 (y) は、基板 7 1 の突部 t 7 の突出幅寸法 g 7 が、有底溝 1 2 の標準溝幅 n 以下に設定されており、起立板 7 2 の自由端 7 2 a 側を天板 1 の使用端 1 a 側に位置させてその突部 t 7 を基板 7 1 とともに有底溝 1 2 に挿入することができる。その結果、起立板 7 2 を寝かせた状態で天板面 f 上に載置することができ、起立板 7 2 が使用者に対して前傾姿勢となる。そのため、この起立板 7 2 上にパーソナルコンピュータ等を前傾姿勢で支持させることが可能となる。このようにして書見台 7 を、パーソナルコンピュータ等のためのチルト台として使用することもできる。

【0075】

ここで、図 50 は、この書見台 7 の正面図であり、図 51 は同側面図であり、図 52 は同底面図である。

【0076】

(5) 植栽ボックス (図 53 ~ 55)

オプション部材である植栽ボックス 8 は、複数本の溝 m (貫通溝 1 0、1 1 0、有底溝 1 1、1 2、1 1 1、1 1 2) を有する天板面 f 上で使用されるものであって、天板 1、1 0 1 の上面 1 c、1 0 1 c すなわち天板面 f に当接する下向面 s 8 を有するとともに、その下向面 s 8 よりも下方に突出する複数の突部 t 8 を備えてなる。そして、突部 t 8 同士の間隔位置が、各突部 t 8 を 1 本の溝 m にそれぞれ係合させる第 1 設置態様 (L 1) と、各突部を異なった溝に係合させる第 2 設置態様 (L 2) とを選択的にとり得るように設定されている。

【0077】

詳述すれば、この植栽ボックス 8 は、開口窓 8 1 a を有する頂板 8 1 と、この頂板 8 1 の両端から下面側に延出させた端板 8 2 と、これら端板 8 2 間に架設されこれら端板 8 2 及び頂板 8 1 と協働して箱形構造物を形成するチャンネル部材 8 3 とを備えたものである。頂板 8 1 と両端板 8 2 とは、板金素材に折曲加工を施すことによって一体に構成されており、板金製のチャンネル部材 8 3 はこれら頂板 8 1 及び端板 8 2 に溶接等により止着されている。

【0078】

両端板 8 2 の下端部には、内方に屈曲する屈曲部 8 2 a と、屈曲せずに下方に垂下する突部 t 8 とが形成されており、屈曲部 8 2 a が天板面 f に当接する下向面 s 8 を備えている。突部 t 8 は、この下向面 s 8 よりも下方に突出している。各突部 t 8 の幅寸法 w 8 はテーブル S 2 T、M 2 T の溝 m の幅 (貫通溝及び有底溝の標準溝幅 n) と同じ又はそれ未

10

20

30

40

50

溝に設定されており、前述の第1設置態様(L1)を採り得るようにしている。また、両突部t2の離間距離は、テーブルS2T、M2Tの特定の溝m同士の離間距離に対応させて設定することによって、前述の第2設置態様(L2)をもとり得るようにしている。この実施形態では、テーブルS2T、M2Tの中央の溝m(貫通溝10、110)と使用端1a、101aとの離間距離d1と、第2の有底溝12、112同士の離間距離d2とを等しく設定している。この植栽ボックス8は、自然の植物や人工の植物を飾るための受け皿として用いることができるだけでなく、共有物等を収納しておくための収納容器としても利用することができる。

【0079】

図53は、植栽ボックス8(x)を第1設置態様(L1)でテーブルS2T、M2Tの天板面f上に載置した状態の一例を示している。この状態では、1本の溝m(貫通溝又は有底溝)に両突部t8を挿入して位置決めした状態で、下向面s8を天板面fに当接支持させている。

【0080】

図53には、植栽ボックス8(y)を第2設置態様(L2)でテーブルS2T、M2Tの天板面f上に載置した状態の一例をも示している。この態様では、植栽ボックス8(y)の一方の突部t8をテーブルS2T、M2Tの溝m(貫通溝10、110)に係合させるとともに、他方の突部t8をテーブルS2T、M2Tの使用端1a、101aに係合させて位置決めを行っている。

【0081】

図53には、植栽ボックス8(z)を第2設置態様(L2)でテーブルS2T、M2Tの天板面f上に載置した状態の他の例をも示している。この態様では、植栽ボックス8(z)の一方の突部t8をテーブルS2T、M2Tの一方の天板の溝m(有底溝12)に係合させるとともに、他方の突部t8をテーブルの他方の天板の溝m(有底溝12)に係合させて位置決めを行っている。

【0082】

ここで、図54はこの植栽ボックス8の正面図であり、図55は同拡大側面図である。

【0083】

(6) シェルフ(図56～図58)

オプション部材であるシェルフ9は、複数本の溝m(貫通溝10、110、有底溝11、12、111、112)を有する天板1、101の天板面f上で使用されるものであって、天板1、101の上面1c、101cに当接する下向面s9を有するとともに、その下向面s9よりも下方に突出する複数の突部t9を備えてなる。そして、突部t9同士の相対位置が、各突部t9を1本の溝mにそれぞれ係合させる第1設置態様(L1)と、各突部t9を異なった溝mに係合させる図示しない第2設置態様とを選択的にとり得るように設定されている。

【0084】

詳述すれば、このシェルフ9は、頂板91と、この頂板91の両端から下面側に延出させた端板92と、これら端板92間に架設された補強用のチャンネル部材93とを備えたものである。頂板91と両端板92とは、板金素材に折曲加工を施すことによって一体に構成されており、板金製のチャンネル部材93はこれら頂板91及び端板92に溶接等により止着されている。

【0085】

両端板92の下端部には、内方に屈曲する屈曲部92aと、屈曲せずに下方に垂下する突部t9とが形成されており、屈曲部92aが天板面fに当接する下向面s9を備えている。突部t9は、この下向面s9よりも下方に突出している。

【0086】

かかるシェルフ9は、デスクS2T、M2Tの天板面fをより効率的に使用するためのものであり、前述した植栽ボックス8と同様な態様で天板面f上に配置することができる。さらに、このシェルフ9は、図56に示すように、開口部pの上に配置することもでき

10

20

30

40

50

る。

【0087】

ここで、図57はこのシェルフ9の正面図であり、図58は同拡大側面図である。

【0088】

＜本実施形態に係るテーブルの作用効果＞

このような構成のテーブルS2T、M2Tであれば、天板面fに複数本の溝m（貫通溝10、110と有底溝11、12、111、112）が平行に表出することになり、それらの溝mを適宜使用して前述したオプション部材4～9等を何らの器具を用いることなく位置決めしたり保持したりすることができる。そのため、シンプルな構成であるにも拘わらず、多様なオプション配置を行うことができ、使い勝手が良好なものとなる。

10

【0089】

また、天板1、101間に形成される貫通溝10、110は、天板1、101の下面1d、101d側と上面1c、101c側と連通させる配線挿通口としての役割を果たすだけでなく、床面に立設したデスクトップパネル支持用の支柱等を通過させる隙間として利用することもできる。特に、貫通溝10、110は、天板1、101の左右方向一端から他端まで連続して形成されたものであるため、利用する箇所を自在に選ぶことができ、使い勝手が良い。

【0090】

さらに、有底溝11、12、111、112は、前述したようなオプション部材4～9の保持や位置決めに限らず、例えば、スマートホンSPや図示しないタブレット端末等を立てかけるために使用することもできる。特に、この実施形態では、各天板1、101に複数本の有底溝11、12、111、112が平行に設けてあるため、使用箇所を左右方向のみならず奥行方向にも変更することができ、多様な使い方ができる。

20

【0091】

貫通溝10、110は、集成材天板2枚タイプのテーブルS2Tのように全体が一定の標準溝幅nを有したものであってもよいが、メラミン天板2枚タイプのテーブルM2Tのように一部が標準溝幅nを有したものであってもよい。しかして、メラミン天板2枚タイプのテーブルM2Tにおける貫通溝110は、標準溝幅nを有する標準溝幅部110aと、この標準溝幅部110aよりも幅の広い拡大溝幅部110bとを有するものであり、拡大溝幅部110bの存在により天板101の上下面を連通させる開口部pが形成されている。そのため、開口部pを利用して配線のみならず、比較的嵩高いコンセントやコネクタ、あるいは床面に立設した支柱等を挿通させることも可能となる。

30

【0092】

また、貫通溝10、110の標準溝幅nと有底溝11、12、111、112の標準溝幅nを統一しているので、見栄えが良好なものになるだけでなく、種々のオプション類4～9を保持させたり位置決めする場合に、貫通溝10、110と有底溝11、12、111、112とを区別することなく自在に利用できる確率が高くなり、利便性が向上する。

【0093】

さらに、集成材天板2枚タイプのテーブルS2Tでは、有底溝11、12の左右両端が、天板1の左右両端まで達して開放されているため、有底溝11、12内に溜まった埃も容易に側方に掃き出すことができる。一方、メラミン天板2枚タイプのテーブルM2Tでは、有底溝111、112の左右両端部111a、112aが天板101の左右両端101eの近傍において閉塞されているが、閉塞された有底溝111、112の両端部111a、112aは、その深さ寸法が漸次小さくなって最端位置（両端111a、112a）で略零になるようにしてあるため、かかる有底溝111、112内の異物も容易に排出することができる。

40

【0094】

しかも、コア材の表面にメラミン化粧板を添設した多重構造をなすメラミン天板2枚タイプのテーブルM2Tは、有底溝111、112を天板101の端部近傍において閉塞しているため、前述した課題2も解消することができる。すなわち、かかる構成によれば、

50

天板 2 の左右両端 1 0 1 e を全面的にメラミン化粧板で覆うことができ、天板 1 0 1 の端部処理が面倒になるという不具合も生じない。

【 0 0 9 5 】

なお、本発明は、以上説明した実施形態に限定されるものではなく、その趣旨を逸脱しない範囲で種々変形が可能である。

【 0 0 9 6 】

例えば、天板の材質は、集成材製のものやメラミン化粧板を備えたものに限定されないのは勿論である。すなわち、集成材製の天板を用いたものであっても、有底溝の両端部を天板の両端近傍で閉塞している場合には本発明を適用することができる。

【 0 0 9 7 】

また、有底溝は、天板の上面に直に刻設したものでよいが、図示例のようにすれば多重構造をなすメラミン 2 枚タイプのテーブル M 2 T 等にも問題なく適用することができる。すなわち、有底溝 1 1 1, 1 1 2 を、各部において一定の深さ寸法を有する溝形成部材 G と、この溝形成部材 G の両端に嵌着され有底溝の端部 1 1 1, 1 1 2 を形成するエンドキャップ H とを天板 1 0 1 の上面に埋設することにより形成されたものにすれば、見栄えがよく耐久性の高い有底溝 1 1 1, 1 1 2 を構成することができる。しかも、このような構造を採用する場合に、溝形成部材 G とエンドキャップ H を長手方向に若干の相対移動を許容された状態で嵌着しておけば、溝形成部材 G 及びエンドキャップ H と天板 1 0 1 との間に生じる寸法誤差や温度変化に伴う相対寸法変化などを吸収することができる。

【 0 0 9 8 】

その他、本発明の趣旨を損ねない範囲で種々に変形してよい。

【符号の説明】

【 0 0 9 9 】

M 2 T … テーブル

1 0 1 … 天板

1 0 1 a … 使用端

1 0 1 b … 反使用端

1 0 1 c … 天板の上面 (天板面 f)

1 0 1 e … 両端

1 0 1 f … 取付溝

1 1 0 … 貫通溝 (溝 m)

1 1 1 … 有底溝 (溝 m)

1 1 1 a … 端

1 1 1 b … 端部

1 1 2 … 有底溝 (溝 m)

1 1 2 a … 端

1 1 2 b … 端部

10

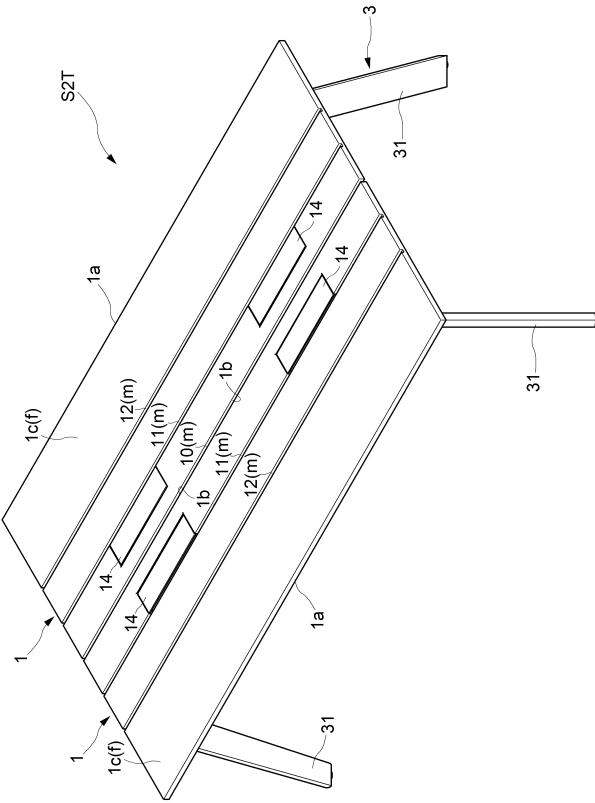
20

30

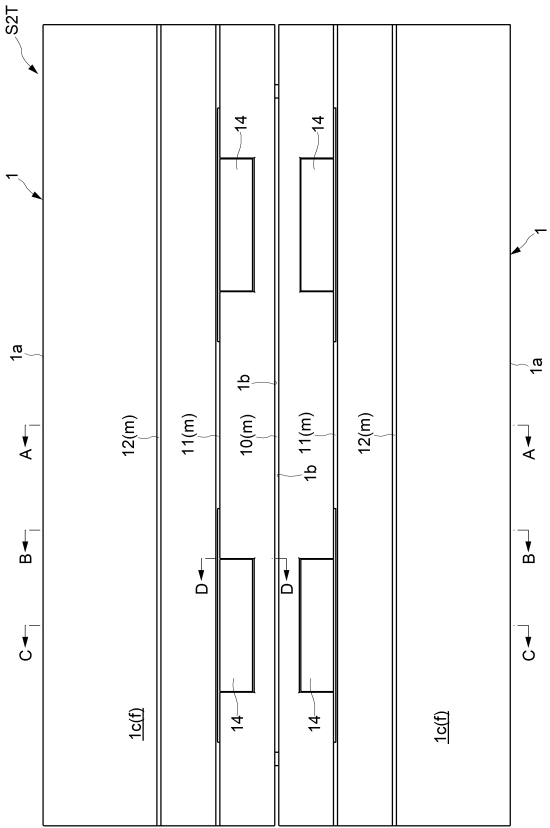
40

50

【図面】
【図 1】



【図 2】



10

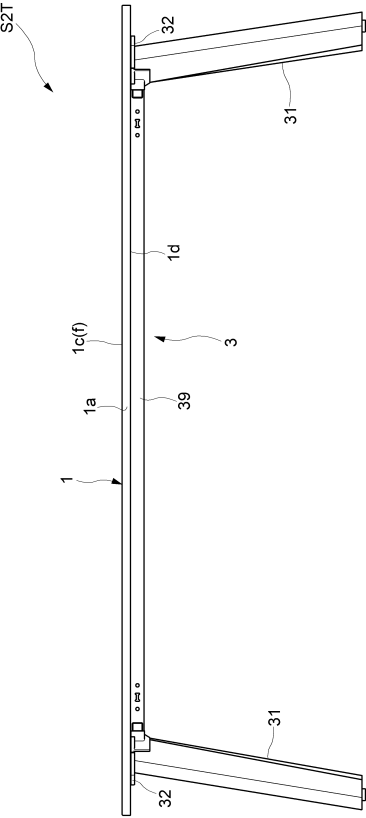
20

30

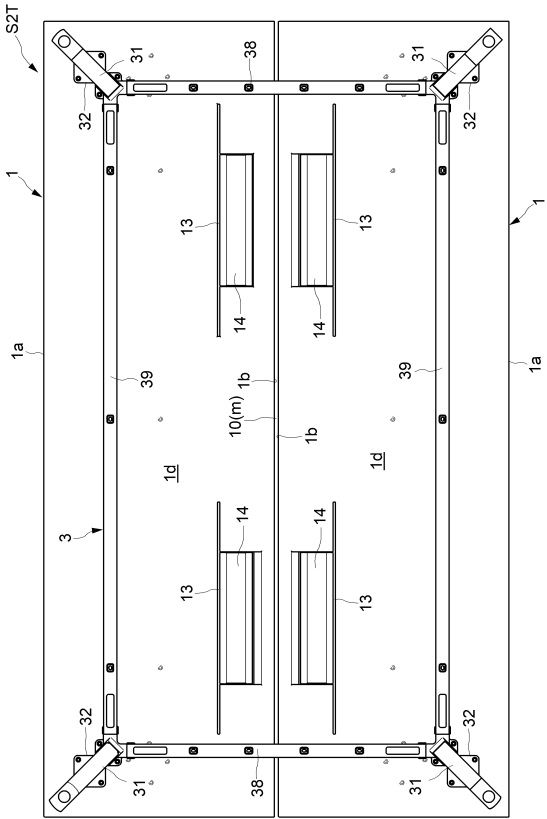
40

50

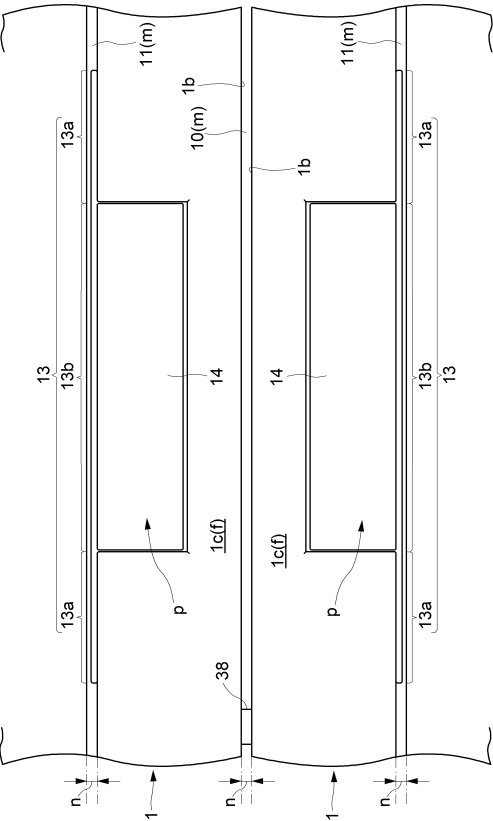
【図 3】



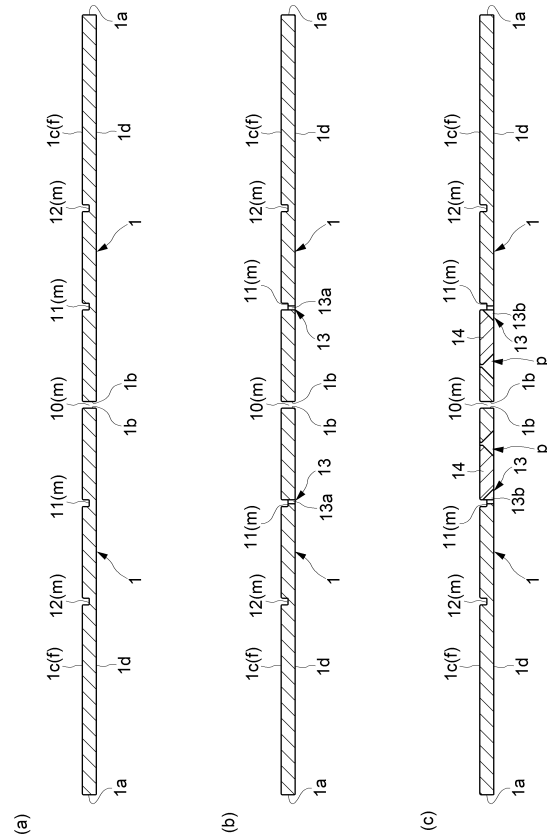
【図 4】



【図 5】



【図 6】



10

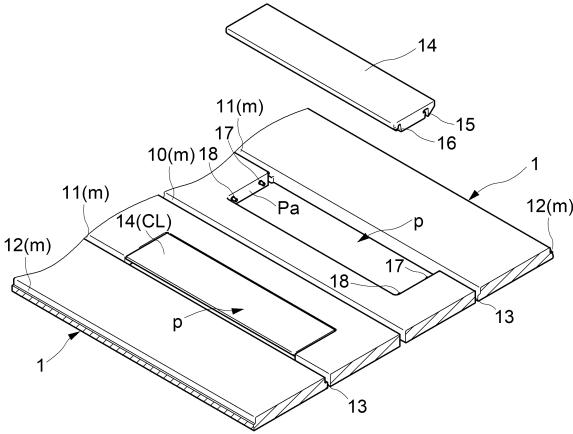
20

30

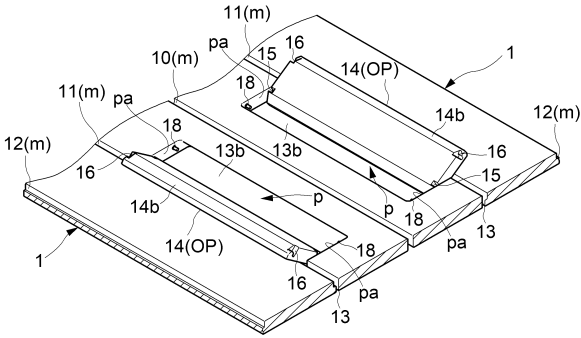
40

50

【図 7】

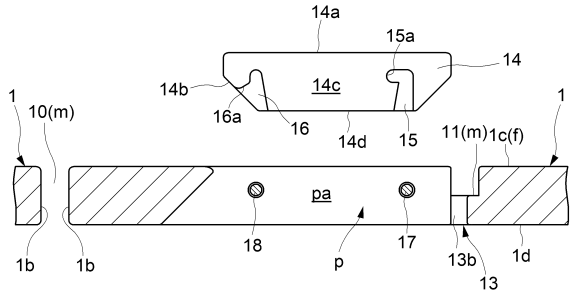


【図 8】

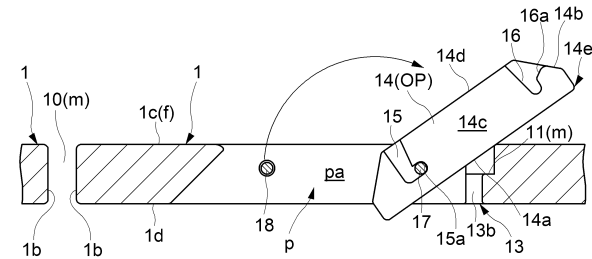


10

【図 9】

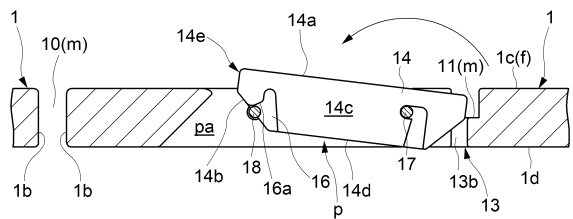


【図 10】

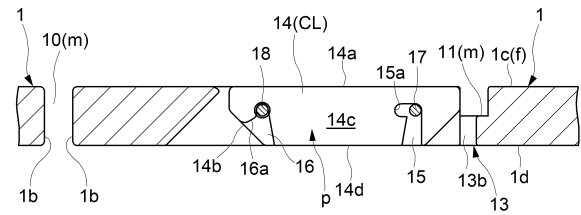


20

【図 11】



【図 12】

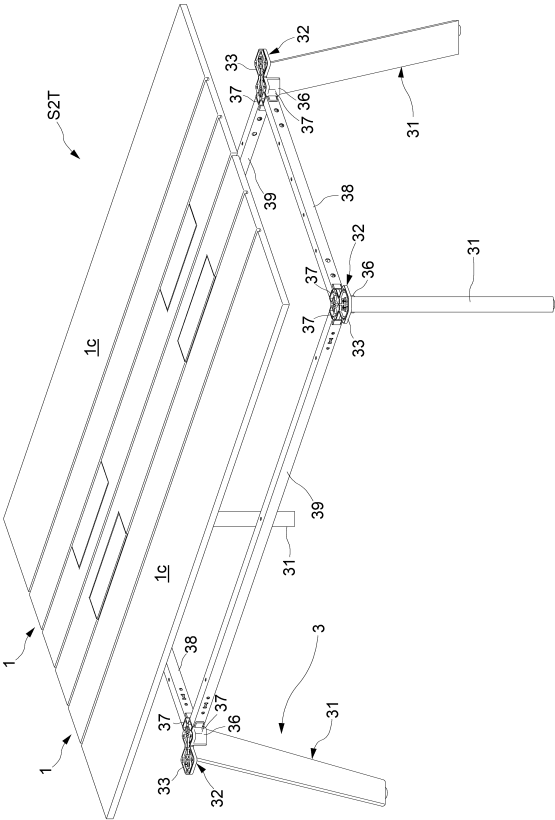


30

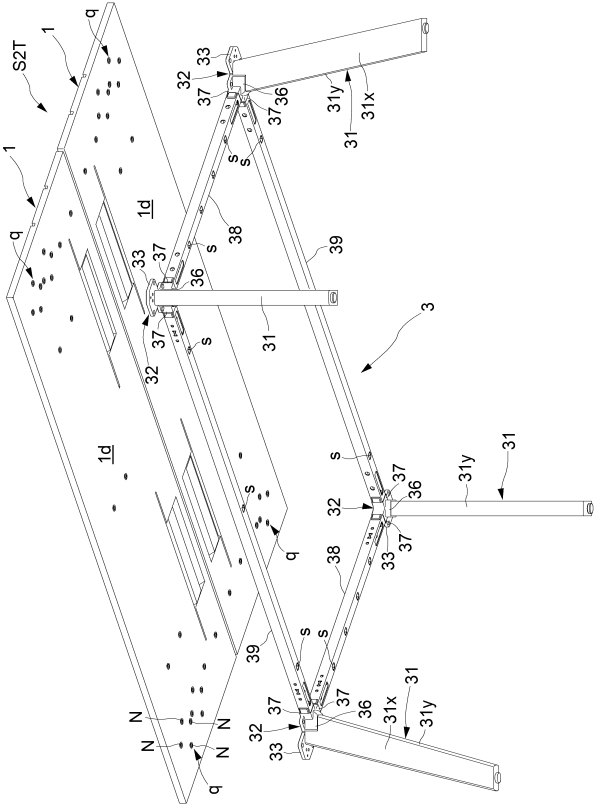
40

50

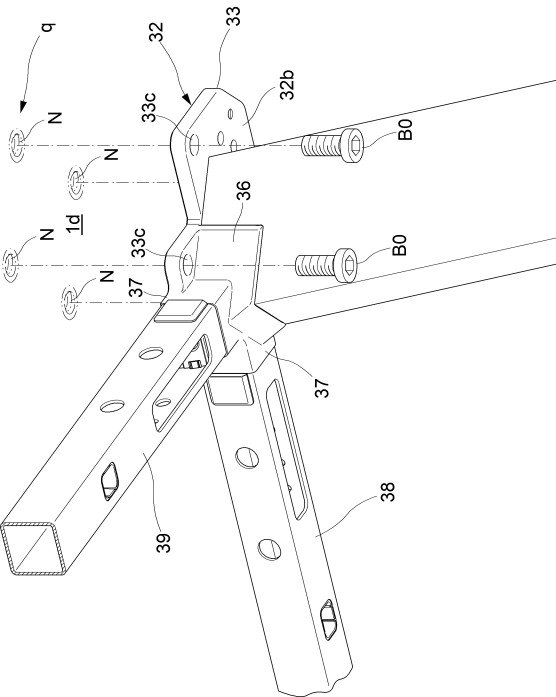
【図 17】



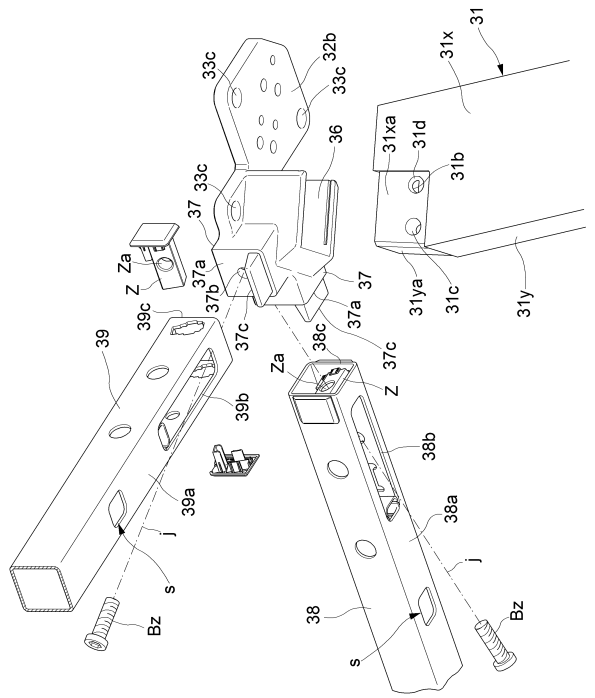
【図 18】



【図 19】



【図 20】



10

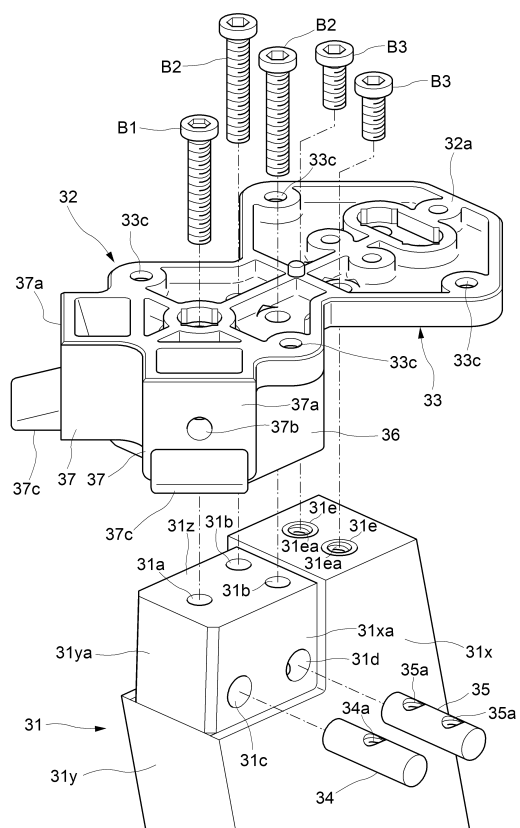
20

30

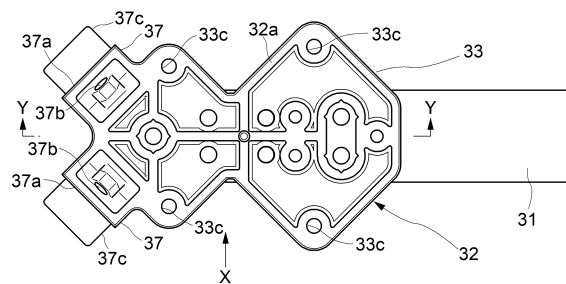
40

50

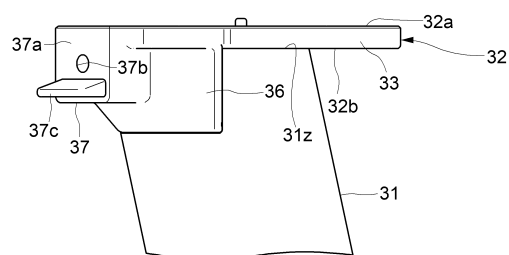
【図 2 1】



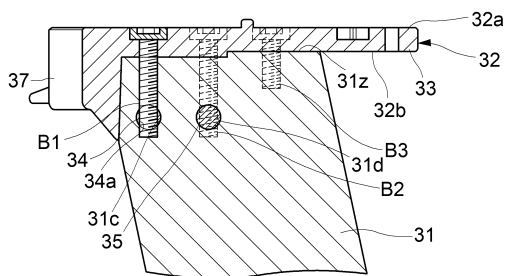
【圖 2 2】



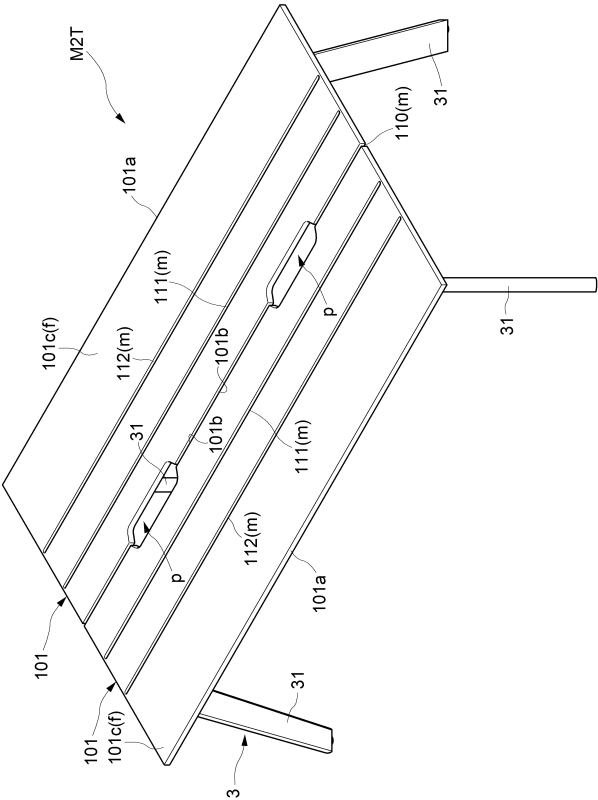
【図 23】



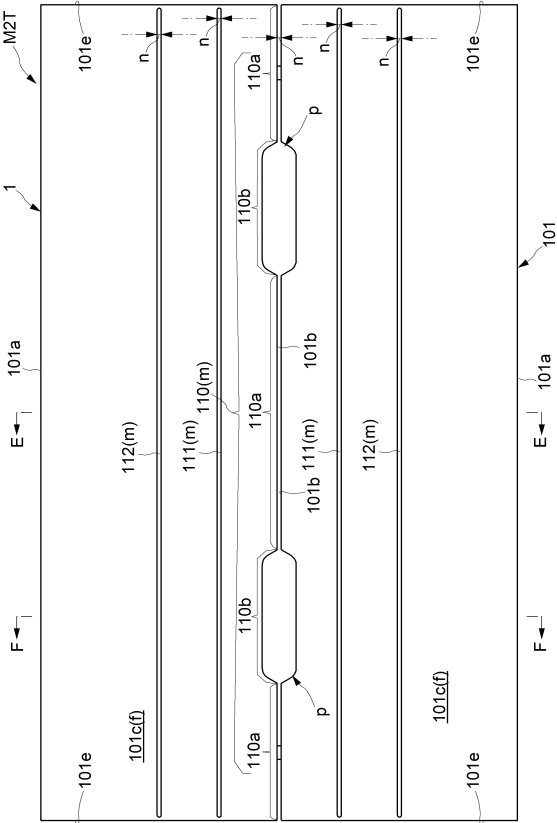
【図 24】



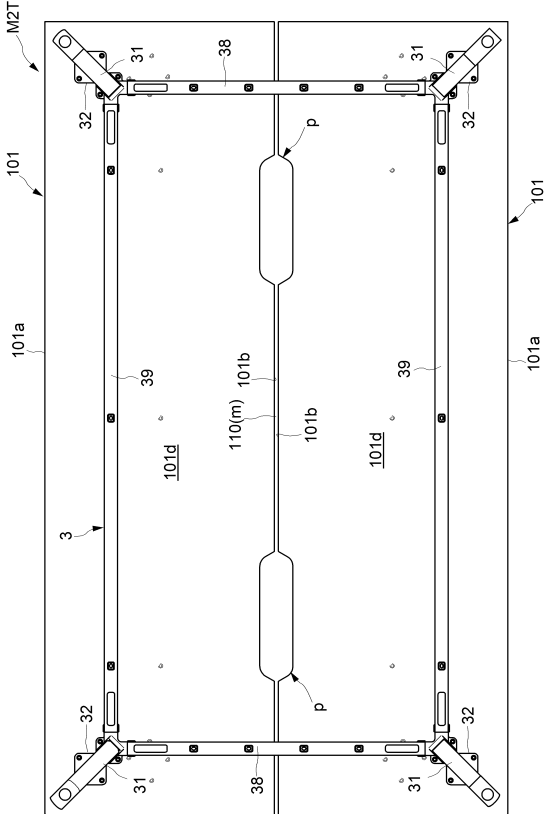
【図 25】



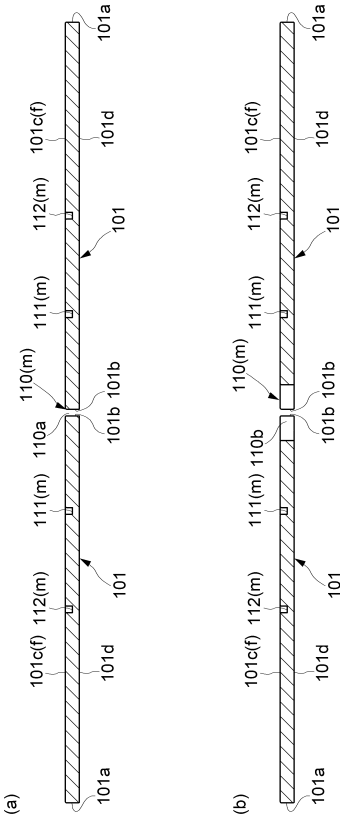
【図 26】



【図 27】



【図 28】



10

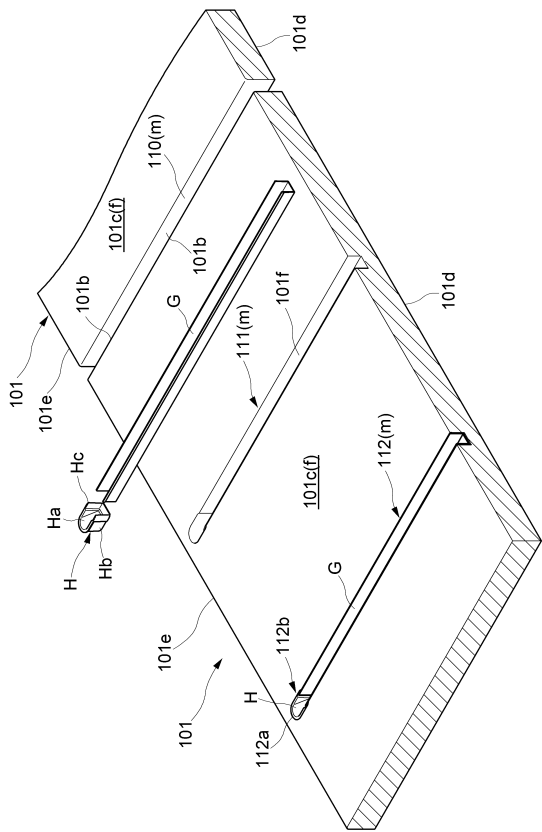
20

30

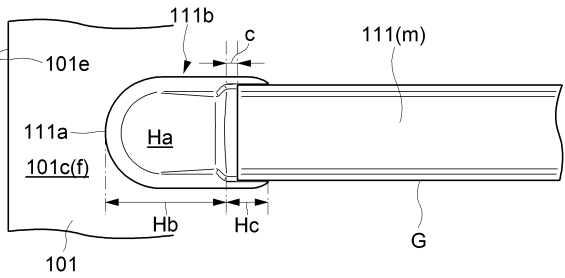
40

50

【図 29】



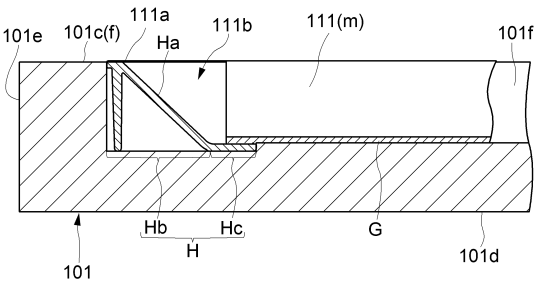
【図 30】



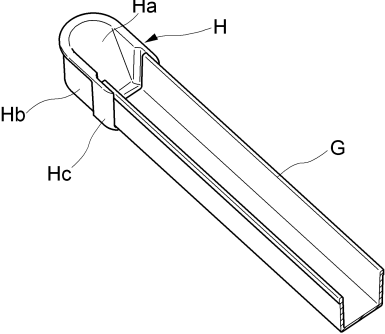
10

20

【図 31】



【図 32】

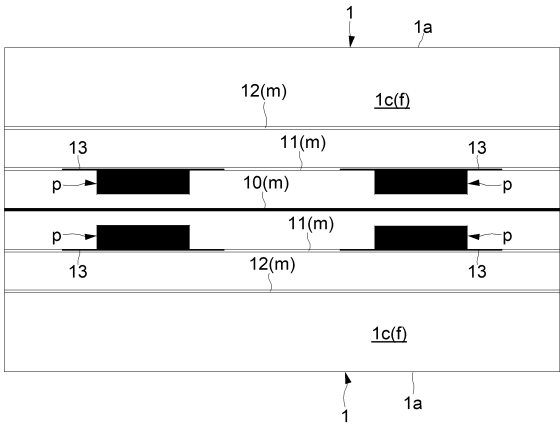


30

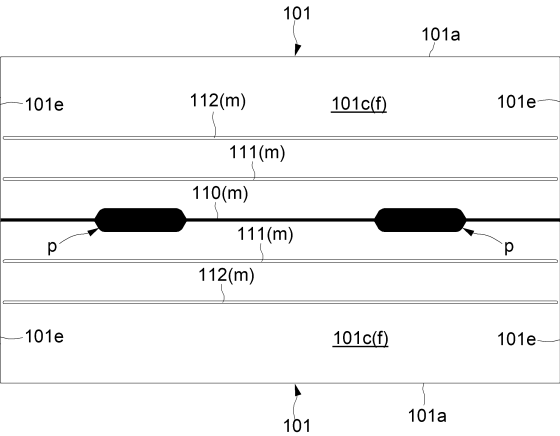
40

50

【図 3 3】

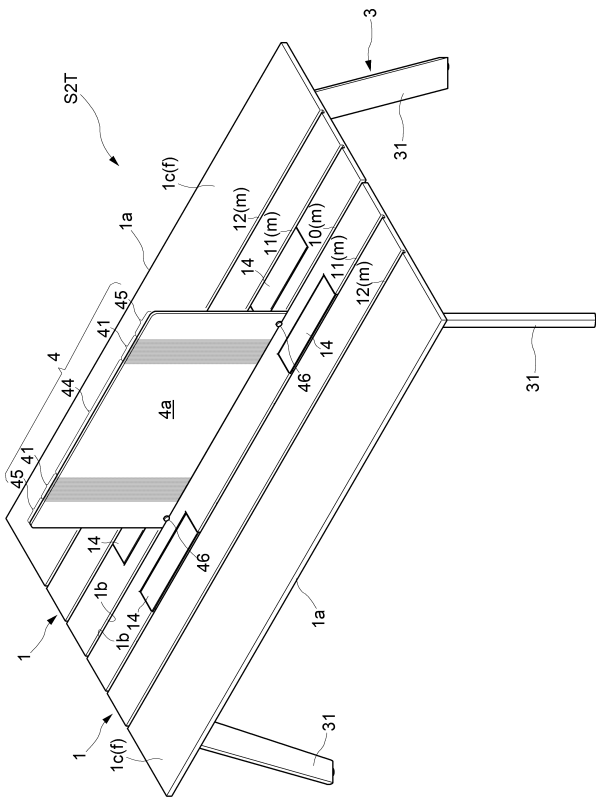


【図 3 4】

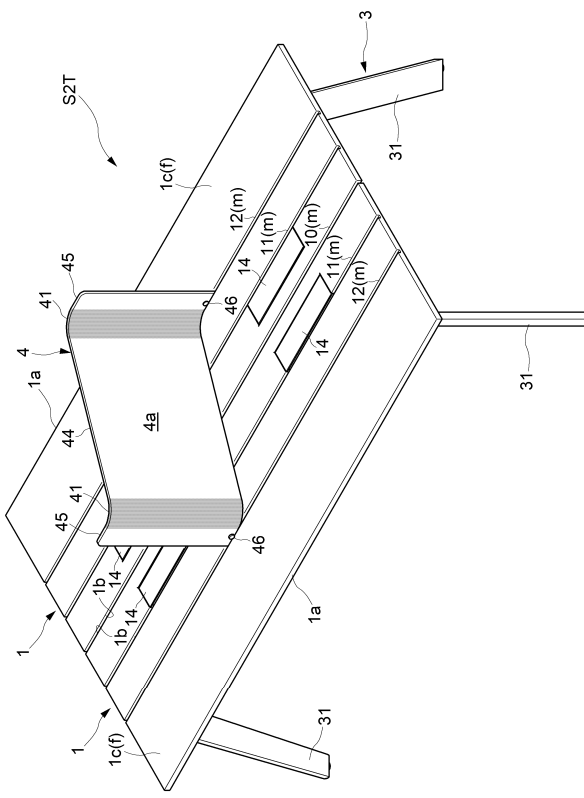


10

【図 3 5】



【図 3 6】



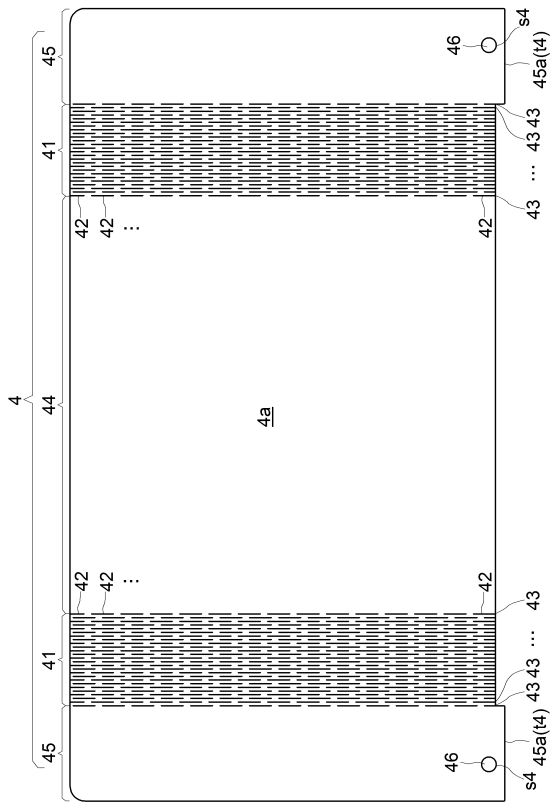
20

30

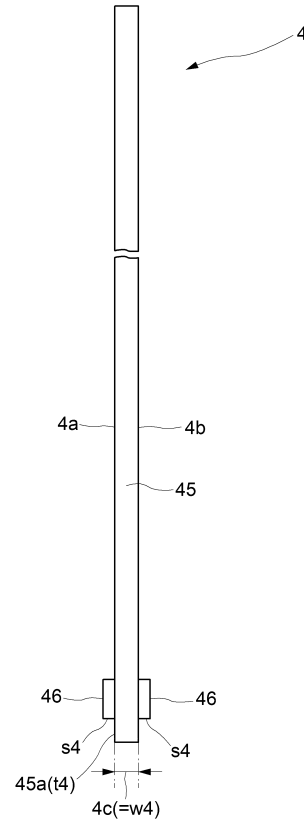
40

50

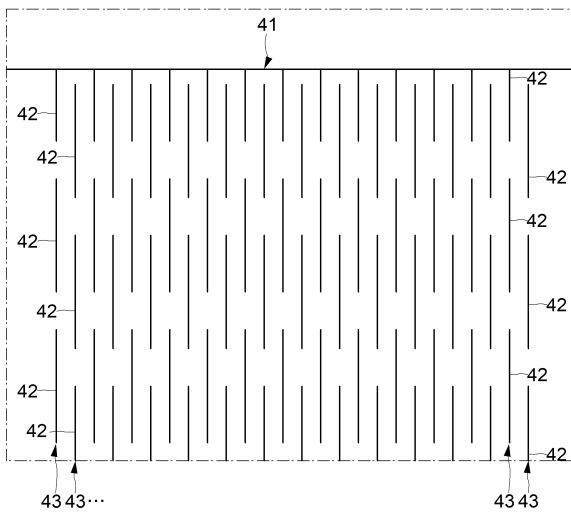
【図 37】



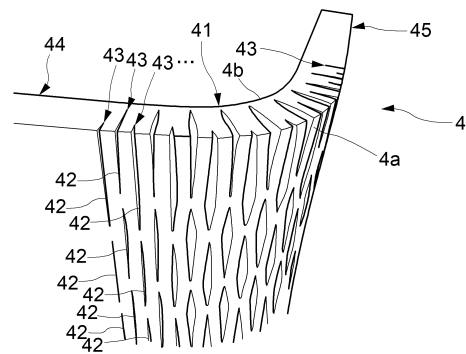
【図 38】



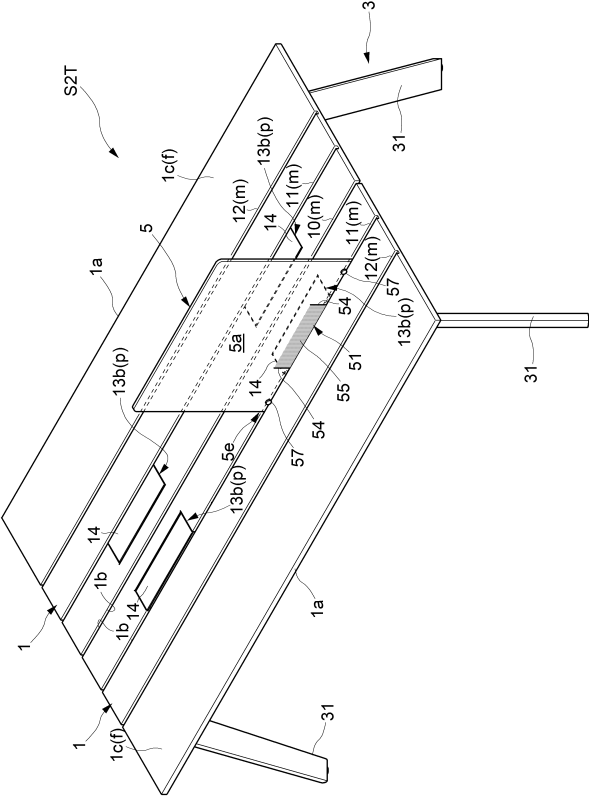
【図 39】



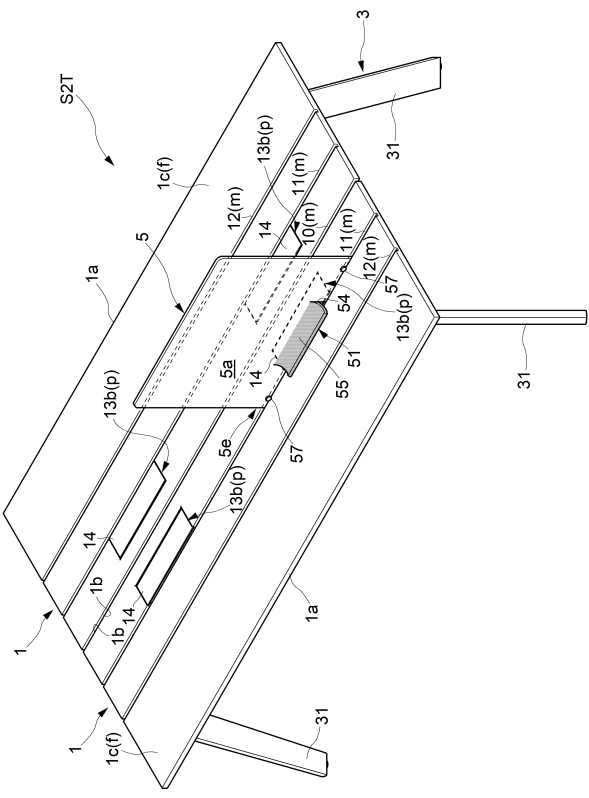
【図 40】



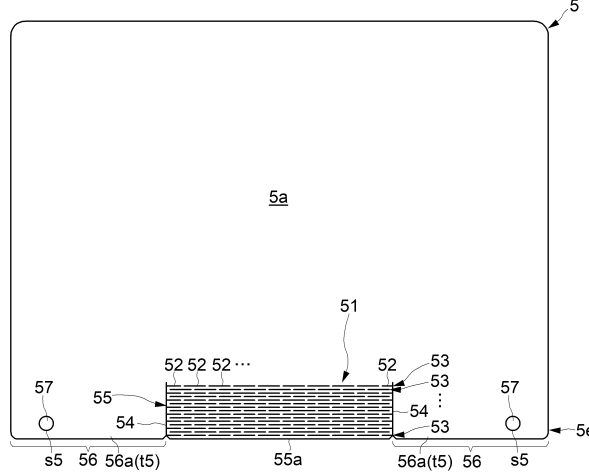
【図 4 1】



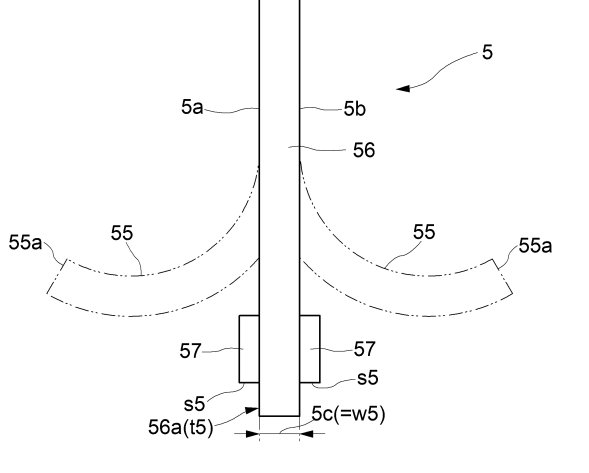
【図 4 2】



【図 4 3】



【図 4 4】



10

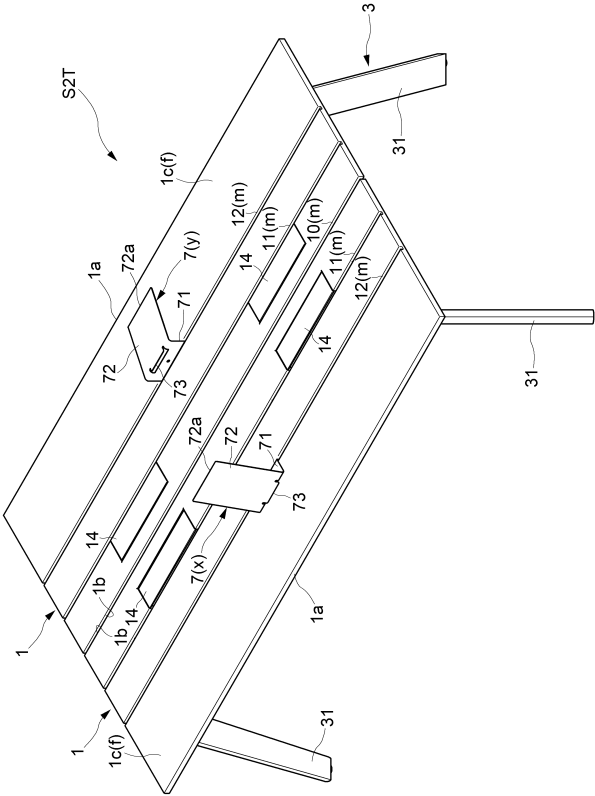
20

30

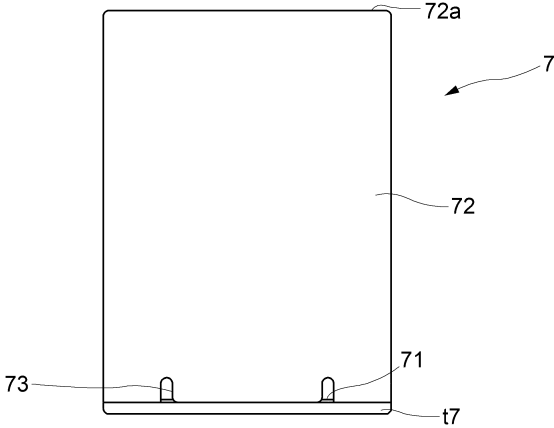
40

50

【図 49】



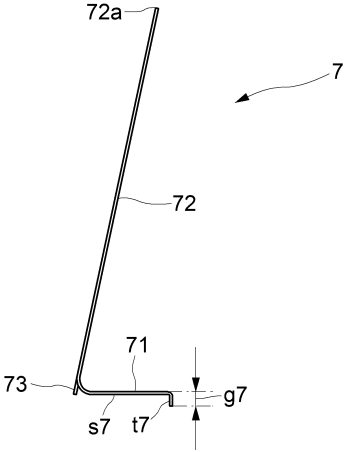
【図 50】



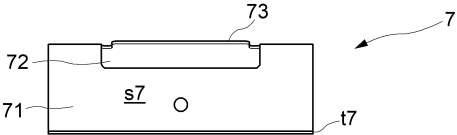
10

20

【図 51】



【図 52】

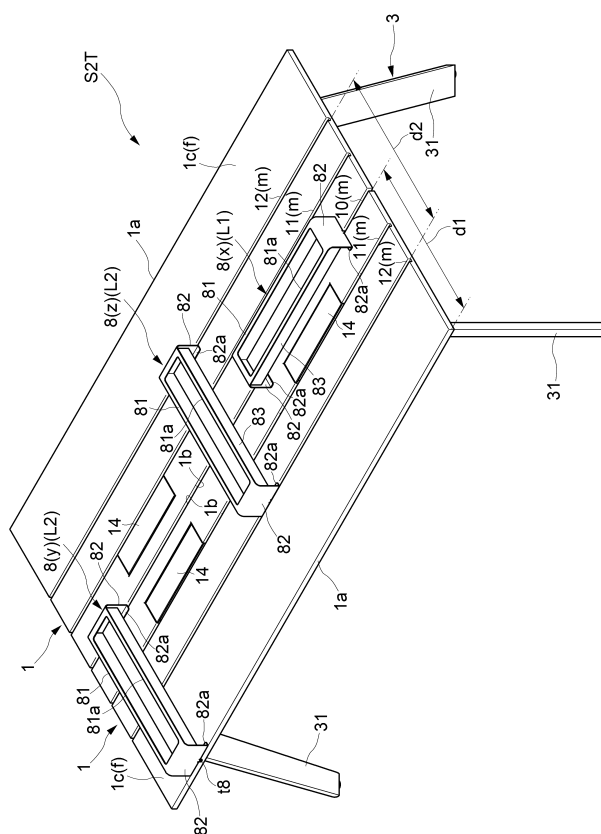


30

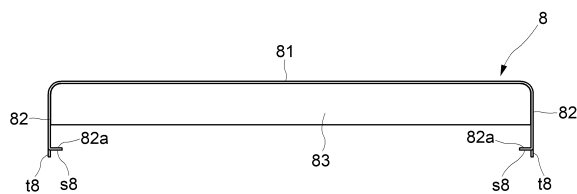
40

50

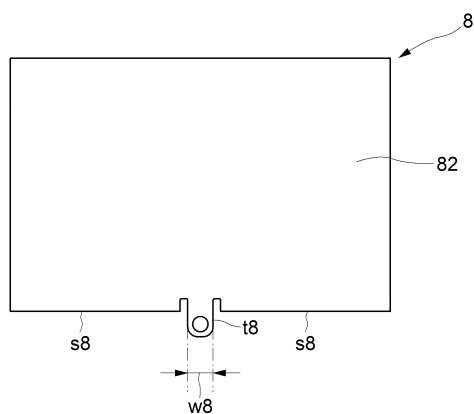
【図 5 3】



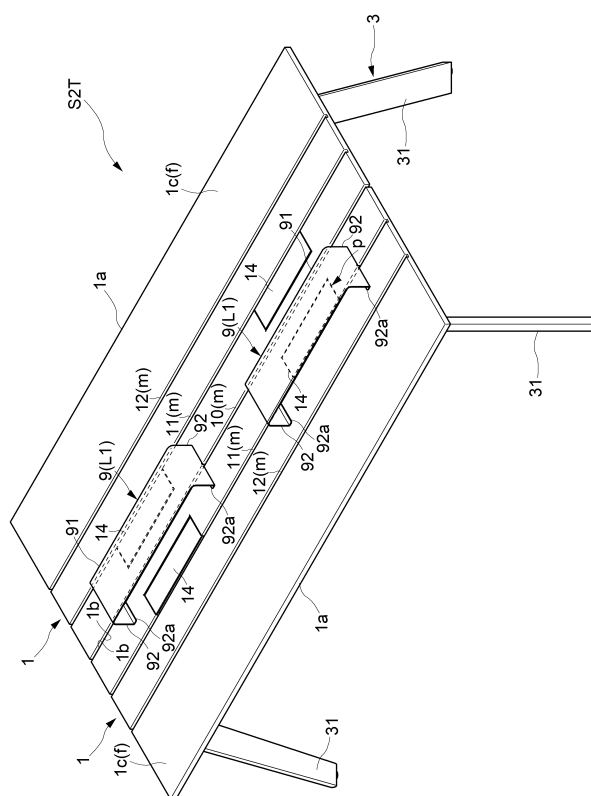
【図 5 4】



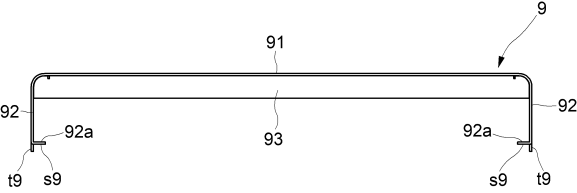
【図 5 5】



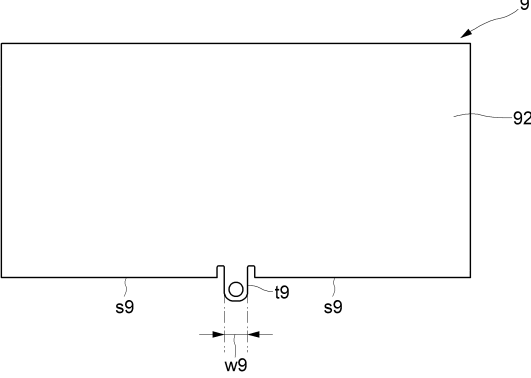
【図 5 6】



【図 5 7】



【図 5 8】



10

20

30

40

50

フロントページの続き

(51)国際特許分類 F I
A 4 7 G 7/04 C

審査官 神尾 寧

(56)参考文献 実開平 0 6 - 0 3 8 6 7 1 (J P , U)
実開昭 6 0 - 0 0 6 4 4 2 (J P , U)
特開 2 0 0 1 - 0 6 1 5 6 0 (J P , A)
登録実用新案第 3 1 9 2 1 8 9 (J P , U)
米国特許出願公開第 2 0 1 8 / 0 0 5 5 2 1 6 (U S , A 1)
米国特許出願公開第 2 0 1 5 / 0 1 7 3 5 0 5 (U S , A 1)
実開平 0 3 - 0 3 3 5 3 0 (J P , U)

(58)調査した分野 (Int.Cl., D B 名)
A 4 7 B 1 3 / 0 8
1 7 / 0 0 , 1 7 / 0 4
4 1 / 0 2 , 9 6 / 1 8